掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成23年9月30日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と
海光るわが故里

第 103 号

かわせみ学園放送講座講義録
岸田劉生と鵠沼(2) …… 岡田　哲明… 1
史跡めぐり「馬込文士村散策」
坂の街・個性の村――「馬込文士村訪問記」…… 安藤　公美…31
馬込文士村とは…… 土岐　臣道…36
鵠沼と馬込〈双方に関わりのある文士など〉…鵠沼を語る会 編…41
エッセイ「くげぬま断章」（Ⅳ）
村上春樹の雑文にふれながらの、ある一日の通信… 山上　英男…45
今井達夫研究
「鵠沼物語」草稿？についての考察…… 岡田　哲明…49
今井達夫遺稿
「鵠沼物語」草稿？…… 今井　達夫…50
活動の記録（平成23年4月～9月）…… 総務担当…63
編集後記 ……66

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841)に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

かわせみ学園放送講座記録

岸田劉生と鵠沼（2）

講師　岡田 哲明（会員）

第3週（2010/12/7放送）

さて、劉生一家が鵠沼に越して来た最初の家は「佐藤別荘」といい神奈川県高座郡大字鵠沼字下岡6662番地、現在の藤沢市鵠沼松が岡3-23にあった木造の2階屋でありました。

引越して来たのは大正6年2月23日、劉生26歳のときであります。

前回お話しした武者小路がいた佐藤別荘と混同した記述をよく見かけますが大分場所が違います。

佐藤別荘の間取り

佐藤別荘は2階建てでしたが間取りはわかりません。写真もないのです。佐藤別荘の規模や環境を知る手がかりとしては劉生の妻、蓁の日記があります。

「この家は南西の明いた見はらしのよい家である。二階の縁に立てば西は富士山がふもと迄よく見えてつづく連山の朝な々々の景色はほんとに美しい。南は江ノ島が一目に見えて海の上を行く、かもめのむれや空の模様で変わる波の色など見る時々におもむきが変わって気がはればれする。そうしてこのうちは住み心地のよい家だけれども大方このうちには六月迄しか居ないだろう。それからはもう少し奥の松本別荘というのにそこが空いたら移る。そこには西洋館があるので。」と書いてあります。ここでいう奥とは海から離れる意と思われます。なお、当時の交通の便はというと東海道線藤沢駅から江ノ電で鵠沼駅下車、人力車または徒歩というもので小田急江の島線はまだありませんでした。

また、娘の麗子の著書には「はじめの家は海に近くて、広い敷地には松林があったりした。私は表門も玄関もまるで覚えていない。（中略）私が知っているのは庭と縁側と便所と、階段と二階と、階段の下の小部屋と、台所と裏の空き地と、別荘番の人が住んでいた小さな家と、松原と小径と、小さな裏門とである。」数ペ

ージ後に「佐藤別荘は絵を描くには南向きで光線の具合が悪く、それにせまいので…」と記しています。

この家の規模は、南側に縁側のついた1階に2間か3間、2階も縁側つきの1間か2間、それに台所、便所、がついた程度ではなかったかと推測されます。

ここで劉生は寝椅子や又はふとんの上で絶対安静療法に入りますが経過が良く1ヶ月ほどすると絵を描きはじめます。4月の草土社展のための作品制作でありました。

この家に滞在した中川一政は劉生の生活ぶりをつぎのように書いています。

「岸田氏は肺尖がわるくて駒沢新町から鵠沼に移ってから絶対安静の状態だったが、それほど病気も悪くなかったと見えて間もなく午前中仕事をして午後は寝たりしていた。その時分私は一ヶ月くらい遊びに行っていた。帰ろうとしても淋しがって帰さなかった。そして「僕はいついかなる時でも友達が来てくれるのは嬉しい」といって人がいても平気で仕事が出来た。そのころ描いた絵が二科会に出した「初夏の小路」や「静物」である。

そのころの岸田氏は朝からオムレツや肉を食べていた。香の物は一切食べなかった。そしてカンシャクを時々起こした。(私が)うららかな空を見上げていると、二階からドサドサと庭へ夜具がおちてくるのは、二階でカンシャクを起こして真っ赤になっているのである。或る日、二階から下りてくると縁側で金槌を持ってカンシャクを起こしていた。器用のようだがカンヴァスが碌に張れないらしい。私が張ってあげたら私が恐縮するくらいお礼を言った。すこしきまりが悪かったのかもしれぬ。とにかく、この時の一ヶ月で私の受けた印象は異様な人である。」

中川一政がいた1ヶ月とはおそらく第4回草土社展（4/20~4/26）が終わったあと4月末から5月末までであろうと思われます。「初夏の小路」は5/17に描かれています。

6月1日の蓁の日記には、5月20~22日に武者小路夫妻が東屋に逗留したこと、30日には劉生は、硲家の鵠沼別荘にきていた画家、硲伊之助を訪ね、別荘番の爺やと五目並べをしてきたことなど「知った方のおられるのはほんとによい。」と書かれています。

察するに武者小路夫妻は劉生を見舞いにきたのでしょう。また3日から10日までの日記には硲宅との往復が頻繁に見られます。硲伊之助はヒュウザン会では

斎藤グループでしたがヒュウザン会 1,2 回展に共に出品していて劉生とは旧知の仲だったのです。

さて蓁の日記の予言通り 6 月に松本別荘に移れることになります。松本別荘の場所は、高座郡鵠沼村字下岡 6732 番地、今の住居表示でいうと藤沢市鵠沼松が岡 4-7-10 であります。

この場所についても間違った記述を多々見かけます。劉生あての書簡をみますと「神奈川県鵠沼海岸」とか「相州鵠沼海岸」の表記で劉生の手元に届いたのです。当時の郵便配達夫は別荘に暮らす人もすぐに覚えてしまっていたのでしょうか。番地が書いてあれば、のちの研究家が場所を誤ることもなかったと思います。

さて大正 6 年 6 月 24 日、椿貞雄に交通費をおくって東京から手伝いに来てもらい松本別荘に引っ越しをします。

松本別荘の間取り

松本別荘の間取りについては三つ文献があります。それは引っ越して間もなくの大正 6 年 7 月 3 日の蓁の日記『岸田劉生全集、月報』と、麗子の著書『父 岸田劉生』と、住み込みの弟子であった棟方寅雄著『劉生と私』とであります。おのおの少しずつ内容に相違があるので、注意して頂きたいとおもいます。

1) 蓁の日記:『岸田劉生全集第 9 巻 月報』岩波書店　昭和 54 年刊

7 月 3 日、晴れ（1917 大正 6 年）

6 月 24 日にこの家に移転した。椿さんがお手伝いに来て下さった。

この家は、8 畳の座敷に 4 畳半の茶の間、3 畳の玄関に 3 畳の女中部屋、湯殿はわりにきれいだ。それに縁側につづいて洋館があるので、それは小さなものだけれども、私たちにはアトリエらしいものといっては、これがはじめてなのでそれがもう、どんなに二人に嬉しいかわからない。鵠沼に来るという事に定めてからすぐこの洋館に入る事を考えていたのだけれども、生憎ふさがっていたので、今やうやう思いが届いたのだから随分よろこばしい。

洋館は 2 階もあってそこには畳が敷いてあるので劉生様の御書斎になっている。

下はゴム引きの、全くの洋室で画室専用にしてある。ひろさは上下とも 8 畳敷きだ。この一むねがあるために、それは摂理よく、住まいよく、毎日楽しく暮ら

している。

家賃は夏冬なしの 10 円だ。この事も鵠沼にはとてもこんな安くは住まわれないものなのだけれども極、都合よくこんな安い家賃で借りることができた。

4 日ほど前から中川さま（中川一政のこと）が泊りに来ておられる。しばらく泊っておられるのだ。この家に来てから丁度中川さんの来られた日に信州から河野さま（河野通勢のこと）が見えて一泊して帰られ、また 3 日ほどまえには清宮さん（清宮彬のこと）が見えたし、昨日からは横堀さん（横堀角次郎のこと）がきておられる。まことに賑やかで、まるで代々木に居た頃のような感じがする。昨日はこの二人と硲さん（硲伊之助のこと）も来られて、つい、めずらしさに 1 時頃までトランプをしたので、きょうは劉生さま寝不足でお仕事も出来ずお風呂召して 9 時前には寝てしまわれた。東京は事のほかの暑さと、来る方ごとに伺ってどんなかと思う。ここはまことに風通しよく涼しくて、さすがは海岸だ。私は海岸に夏を過ごすのは、それどころか海岸に住居するのは今度が初めてだ。8 月はどんな様子かと今から思っている。

2) 麗子の著書：岸田麗子著『父・岸田劉生』雪華社　昭和 37 年刊

松本別荘というのは、正面の小高い松林のなかに大きな邸宅があり、門の前からずっと道ができていて、その両側の松林のなかに点々と貸し別荘があり、ひょうたん池があったりたいこ橋があったり築山があったり亭があったりしてなかなか凝っていた。真ん中の太い道の入り口に、大きな二本の門柱があり、そこに「松本別荘」と筆太に書いた表札が掛かっていた。入り口の門柱のすぐ右側の家が私達の家だった。松本別荘のなかの一番入り口の家で、電車の停留所（注：江ノ電、鵠沼駅）の方からから来る道に面した所は、土が高く盛り上がっており、そこに松が生えていて自然の垣根になっていた。松本別荘の大きな門柱を入ると両側は竹垣になっていて、所々に点在する家々のこじんまりした門があったりした。そのじぶんはだいたい避暑に来る人とか、胸を患っている人が療養に来るような土地柄だったので、どの家も 3 間か 4 間位の手頃な家の中で私達一家が住んだ家だけが母屋のほかに洋館の 2 階建ての一棟がついていたのだ。洋館の 1 階が画室で、2 階は書斎兼客間兼父の寝室だった。こうして狭くとも父は生家を離れてから初めて自分の力で洋間の仕事場を持つことができた。（中略）今度の家もこの辺の家が多くそうであるように、手頃な丸太を 2 本立てた門があり、ちょっとだらだら

と小高くなって玄関があった。格子を開けると三和土に沓脱ぎがあり2畳の玄関があって、玄関を中心に向かって右に8畳の座敷があり、奥に4畳半の茶の間、その左が3畳の女中部屋でその奥に風呂場があり左手に台所があった。8畳の座敷は庭に面してかぎの手に廊下があり、(後に玄関の壁を壊してドアに改造し、来客は部屋を通らずに廊下を通って洋館のほうへ行かれるようにした) 一方は茶の間に通じ、一方は床の間と押入れになっていた。これが一家が生活するための母屋であった。8畳の廊下の突き当たりに便所があり、その右に洋館に通じる半畳の廊下があってそこに立つと目の前が画室のドアで左に2階へ行く階段があった。洋間は8畳だった。

画室は北側の窓からだけ明かりをとって、東と南の窓にはいつも厚地のカーテンが下ろしてあった。東側の方に小さな机が、どんな台だったか覚えていないが、何かの台の上にのっていて、そこにはたいてい静物の材料が置いてあった。その横の北側のほうに父の大きな画架があり、籐で編まれたつづみ型の椅子が父の絵を描くときの椅子だった。この椅子はまだいくつかあって、一つは大人のモデルの時に使われたし、他は2階の書斎に置いてあった。腰掛けるとギシギシときしんだ。父は窓を背にして座り、斜め右側にモデル台があって、モデルになる時はそこに座った。モデル台からは窓の外が見えた。前は原っぱでところどころに小さな沼があって、秋には澄んだ空とちぎれ雲が、黄色い枯れ草の間の沼に映って秋らしい美しい景色だった。

3) 棟方寅雄の著書：棟方寅雄著『劉生と私』緑の笛豆本の会　昭和41年刊

私は戦後間もなくこの家恋しさにひとりで訪ねてみた事がある。家の姿は今も昔のままながら棲む人はもとより昔の人ではない。私は案内を乞うて「30年ばかり昔に私がこの家に居たことがあるのでなつかしさのあまり今日訪ねて来た。2階の窓からの景色をひとめ見たいから、2階に入れてくださるまいか」と頼んだ…(中略) 2階の窓から見た景色は劉生が幾度か作品のモチーフとして絵を描いたところである。私は2階の窓から外を眺め、しばし懐旧の情に耽り窓外風景の写真をとり、やがてそこの見知らぬ人に篤く厚意を謝してそこを辞したことである。(中略)

玄関の2畳間が私の部屋、次が4畳茶の間、玄関の向かってその右が8畳座敷兼家族の寝室、更に右に廊下を隔てて6畳画室、画室の二階が劉生自身の寝室兼

書斎。茶の間の左が台所である。(以下略)

棟方寅雄はこのとき、まず鵠沼海岸商店街の有田商店を訪れ、有田さんに案内してもらって劉生の旧居をたずねて行ったらしいのであります。なかに上がらせてもらい、かつてのアトリエの2階窓から片瀬山の方角の写真を撮りました。土方定一著『岸田劉生』に掲載されているのがそれで、棟方はこのとき有田さんのお父さんのスナップ写真も撮って郵送してきたのを有田さんはお持ちであります。

3者の相違点を見ると玄関と茶の間と洋館のひろさが違います。

玄関はそこに2年ほど起居した棟方が正しいと思われるし、麗子も2畳としています。

次に茶の間は4畳半が妥当でしょう。棟方は半を書き落としたのだと思います。

洋館の広さは棟方の記述に依りたい。何故なら　蓁の日記はこの家に移って 1週間目の記述であるし、麗子は9歳までの記憶であるのに対し、青年の棟方は2年間、毎朝劉生の書斎の掃除を日課として科せられていたからであります。また劉生の日記にも画室の暗さ狭さを不満に思い明るい広い画室を切望する記述が再三出てきますし、この洋館は地元の人からは火の見櫓といわれていました。それは縦に細長くて方形(ほうぎょう)の屋根で、なおかつ赤い色をしていたからなのです。方形の屋根とはピラミッドのような正四角錐の形状をいうのであって平面は正方形でなければならない。2間(けん)平方であれば階段を除けば 6 畳間。2.5間(けん)平方であれば 10畳間となり、8畳間にはなり得ないのです。

そのほか、間取りを窺い知る手掛りとして人物写真の背景に写っている窓とかドアとか床の間とか、劉生の日記の絵があります。写真は美術展カタログや出版物に公表されているもののほか国立近代美術館所蔵の岸田家アルバムを調査しました。劉生絵日記からは家の内外観の知れるもの、家具のレイアウトが知れるものなどを拾い出し、部屋別に分類いたしました。それらを総合して縮尺 1/50 の外観模型と 1,2 階の平面図および西洋館の家具レイアウト図をつくったのです。(テキスト参照)

それで分かったことは西洋館は後から増築されたものと推測できることです。

建物の外部仕様

母屋（木造平屋建て）

外壁：杉板下見張桟押え

屋根：寄棟造、瓦葺き、下屋部分は鉄板平板葺き

建具：玄関桟唐戸スリガラス、雨戸、ガラス戸

西洋館

外壁：ドイツ下見板張りペンキ塗装

屋根：スレート葺き

建具：上げ下げガラス窓ペンキ塗り

母屋の内部仕様

床：玄関土間はタタキ、和室は畳、廊下、脱衣場、便所は縁甲板敷

壁：真壁

天井：杉板張り

建具：障子、8畳客間は雪見障子、襖、板戸

設備

電気：電燈、コンセント

給水：井戸から手で汲み上げる

排水：どぶに排水

汚水：汲み取り便槽

電話：なし

西洋館の仕様と家具レイアウト

1階：画室

ドアは開き戸でそれを開けて入ると、接客用の籐で出来た丸いテーブルと籐で出来た肘掛椅子が2脚、劉生用の背付丸椅子が1脚、南と西の壁際に本箱、北側は窓を背にして大きなイーゼル、鼓型の籐のスツール(制作のとき劉生が座る)、窓際に画材用引出付き戸棚、西側押入れのドア脇つまり入り口のドアと押入れのドアとの間の壁の前にモデル台(古い本箱を伏せた物)、東の壁際に静物用の2段重ねた机、冬には真ん中に灯油のストーブ、窓は井桁に桟の入った上げ下げ窓で透明ガラスが嵌めてある。北と東は1箇所ずつ、南は2連になっていて北窓以外

は厚地のカーテンが下げられていました。床は藁の日記ではゴム引きとありますがリノリュウムシート敷きでしょう。壁は漆喰塗の大壁天井は格天井であります。

このように応接用と制作用の家具を6畳の広さに置くとかなり窮屈です。

2階：書斎兼寝室

階段を上がって右手が入り口のドア、なかは6畳の畳敷き。北側窓際に小さいイーゼル、イーゼル脇に画材用の丸いテーブル（卓袱台のようなものか）、籐の肘付椅子、北東角に十字屋で買った蓄音機、東窓に面して立派なデスク（当時鵠沼の妻の実家に住んでいた和辻哲郎から貰ったもの）背もたれ付き回転丸椅子（オルガンと兼用か）、南東角にヤマハの足踏みオルガン、籐の寝椅子（母屋の広縁に置いた時期もある）、火鉢（冬は炭、夏は蚊遣り用）、その空いたスペースに棟方の記述によれば敷き布団5枚、掛け布団10枚を重ねて掛けていたという、夏には蚊帳を吊っていた様子も絵日記に見えます。

床は畳敷き、壁は白漆喰大壁、天井はアトリエと同じく格天井であります。

この西洋館は昭和40年頃まで現存していました。昭和36年7月27日、週刊朝日に載った記事がきっかけで麗子とお松は40年振りに再会し、なつかしい西洋館を二人で訪れました。

当時、麗子は『父岸田劉生』を執筆中であったと思われます。お松と逢って、あやふやな記憶を確かめた事柄が多々あったのではないかと私は考えています。『父岸田劉生』は丁度その一年後、昭和37年7月25日に雪華社から出版されましたが、残念ながら麗子はその本を手に取ることは出来ませんでした。なぜなら出版される僅か2日前に、くも膜下出血で48歳の生涯を閉じてしまいましたから。早世した父の系統のDNAを受け継いでいたのでしょう。

第4週（2010/12/14放送）

では劉生はどんな制作を鵠沼でしたのでしょうか。

静物画について

劉生は佐藤別荘でも松本別荘でも静物画を描いています。モチーフはバーナード・リーチの焼き物とか果物などセザンヌの影響をおもわせる佳品が数点ありま

す。佐藤別荘で描かれたものは正面光線ですが、松本別荘での作品は明らかに左光線で描かれています。バックの壁がテーブルに平行に描かれているものと壁のコーナーが描かれたものとがあります。ここにも画室のレイアウトが影響している事が窺われます。

風景画（窓外風景）について

劉生は現場主義でしたから、風景は戸外で描きました。ですから1階のアトリエでは制作されていません。ただ、劉生は2階の書斎の北窓から小高い山を望む眺めが気に入ったらしく何点ものスケッチや油絵作品を残しています。土方定一は『岸田劉生』（日動出版）p159で棟方が撮った写真と「窓外風景」を対比させています。

鵠沼を語る会の伊藤聖会員（古志秋彦：詩人「同時代」同人）は「ここに描かれている小高い山はどこか。」を考察し会誌「鵠沼」85号に発表しました。鵠沼の作家、今井達夫は中学生のころ、劉生と道で会えば目礼をする間柄であったといいます。

「或る日、宿題の水彩画を描いていると、後から劉生がやって来て並んで絵具箱を開いた。私は彼がどんな風に描くか興味を抱いて注視していたが、途中で声を掛けずにいられなくなった。岸田さん、あすこの電信柱がないじゃありませんか。すると、度の強い近視眼鏡を光らせて私を見た劉生の口から、たった一言が力づよく漏れた。いらんものはいらん。その一言は雷のように私の中を走りすぎた。そのいらない電柱とは——午後に日射しのあたっている片瀬の山を描こうとすると、すぐ近い位置にあって、邪魔になっていたそれのことであった。」と鵠沼物語に書いています。

それで伊藤会員は鎌倉片瀬山山系の駒立山(海抜 69.2m)から赤山一帯であると結論づけ「鵠沼 85 号」に発表されました、今の、新林公園の裏山から片瀬山団地のあたりです。私が鵠沼に来た頃、造成中の片瀬山を通ると赤山開発反対と書いたベニヤ板がそこここに立っていた記憶があります。最近は赤山という地名もすっかり耳にしなくなりました。

劉生の日記には午前からこの風景に取り掛かったがうまく行かず中止したくだりがあります。このアングルは今井達夫も言っているように、午後にならないと順光とはならず、特に晴れた日の午後は赤土の山肌が映えて一段と彼の創作意欲をかきたてたのでありましょう。霽日（せいじつ）とか晴れた日と題名に謳ったのもが多々あ

るのも頷けるのであります。

人物画について（右向きか、左向きか）

住環境が作品に及ぼす影響といえばそのほとんどがアトリエ内で制作される人物画が最もその影響を受けるといえます。劉生はその作品中、人物画の占める割合が非常に多いから人物画家といってよいでしょう。代々木時代の首狩りといわれた頃から何枚もの自画像をはじめ多くの人物像を描いています。調べてみるとこの時代の約45%が右向き、他は正面または左向きであります。通常、右利きの人は顔に限らず犬でも鳥でも左向きのほうが描き易いものであります。劉生は右利きですが右向きを苦にしないタイプだったのかもしれません。

ところが鵠沼時代の人物画を調べると、なんと右向きが85%を超えるのであります。これは単なる好みでは説明のつかない異常な数字と言えるのではないと思います。それなりの訳があるはずです。口頭で申し上げるのを頭の中で部屋を想像するのは大変とは思いますが前回お話ししたアトリエを思い出して下さい。

ざっと、おさらいしますと広さ6畳、西側は階段があるので窓なし、北面1間半の中央に半間の上げ下げ窓、東面2間の中央に半間の上げ下げ窓、南面は半間の上げ下げ窓が2連ある。蛍光灯もない当時は北側から差し込む光が最も安定するとしてアトリエは北光線が常識であったから、東と南の窓は厚いカーテンで遮光したのです。さて西側の壁をバックにモデル台を据えモデルに北窓の外を凝視させ北光線で描くにはこのレイアウトか左右反転して東壁側にモデル台を置くかですが、それでは東窓のカーテンからわずかの光が漏れてもモデルに逆光が射すことになりカンシャク持ちの劉生には耐えがたかったに違いありません。この狭い6畳の部屋でよりよい光線を求めればこの家具配置しか答えがなかったといえるのではないでしょうか。

劉生の人物画の右向き偏重はこの要素抜きには考えられないのであります。

ではこのモデル台には誰が座ったのでありましょうか。最も多いのは、皆様ご承知の通り娘の麗子であります。その作品の数は昭和49年に東珠樹が出した「岸田劉生とその周辺」という本に麗子像作品総目録を巻末にまとめています。それによると鵠沼時代に描かれた現存する作品だけで50点あります。ただしこのリストに漏れている現存作品も何点かありますが、これは関東大震災と戦災を免れた数であり、おそらく実制作数は100点を越えるのではないでしょうか。ただ、

ここで言っているのはアトリエでちゃんと描いたデッサン、水彩、油絵を指しているのであり、日本画や本の装丁用に描かれたものを含みません。もしそれらを加えたら膨大な数にのぼります。

さて麗子が最初にモデルとしてここに座ったのは大正 7（1918）年 10 月「麗子五歳の像」が描かれた時であります。いったいどのくらいモデルをしたのかを麗子の次女で画家の岸田夏子さんが日記から調べられました。それによると大正 9 年には 89 日、大正 10 年には 112 日、大正 11 年は 115 日、大正 12 年は 4 月までに 28 日となっています。日記がないので大正 8 年以前のことは分かりませんが、大正 8 年の作品が 8 点現存しますから、やはり 1 年に 100 日前後はモデルをしたと考えられます。平均すれば 3 日か 4 日に 1 回ペースですが劉生は周期的に麗子が描きたくなったようで、たとえば大正 9 年の 7 月 8 月は 18 日ずつ、9 月は 1 日だけ、10 月は 11 日、11 月は 12 日、12 月は 4 日だけ、翌年 1 月は 1 回だけといった具合です。最も集中したのは大正 10 年 9 月の 28 日というモデルをしない日が 2 日しかない時もありました。これには麗子の健康状態も影響していて、彼女はしょっちゅう体調を崩すのです。そのため、劉生は描きたくても断念せざるを得ない日がままあったことが日記から伺われます。大正 12 年は 5 月以降、震災までの 4 ヶ月まったく描いていません。あどけなさが抜けるにつれて創作意欲が薄れたのでしょうか、次にお話しするお松についてそんな記述があります。

2 番目に多いのは村娘「於松」です。彼女は麗子より 3 歳年上の明治 44（1911）年 8 月 24 日生れ、お父さんは葉山虎吉といい、麗子の著書には漁師であったと書いてありますが、飼っている豚の餌に残飯をお松さんが貰いに来た様子が日記にありますから、当時鵠沼土着の人に多い半農半漁であったと思われます。お母さんはサダといって家から近い佐藤別荘にお手伝いに来たとき、末娘だったお松さんを連れて来たのでありました。

彼女は格好の麗子の遊び相手になり、二人はすぐに仲良しになりました。松本別荘に移ってからも、この関係は続き、劉生がお松さんを最初にモデルにしたのは大正 7（1918）年 11 月に描いた「村娘の図」です。この絵は翌月の色刷画会に色刷り印刷して会員に頒布されました。その会報に「この子がこの羽織りを着て学校から帰るところを見て随分いい材料だと思って描くことにしたのでした。麗子の肖像を描いたので子供を描くことに気が向いていたので猶これを描く気になったのでしょう。しかし味はまるで違ったものです。この絵に描こうとしたも

のはいろいろあって一口には言えませんが鄙びた田舎娘の持つ或る美です。間の抜けた、気の利かない、時代遅れの、善良な感じ、こういう感じの美というものが確かにあります。デウレルやヴァンエックの或る絵にはこの味が美しく出ています。僕もそれらの絵からこういう感じの美の深さを教えられていました。構図もそういう風に取りました。花を持つ手は素朴に、キョトンと前方を見て無心でいるような感じを取りました。花はツワブキという花でやはりこの感じにふさわしい変な美があると思います。着物や羽織もじつに美しいものです。それがいかにも田舎風な模様はその色が褪めているのと相まって不思議な美をもっていると思いました。」と書いています。

それからというもの劉生は「さあ、今度はデコちゃん（麗子のこと）の番だよ、お松ちゃんとどっちが描きいいかな」などといってこの二人を競わせてモデルにしたのです。お松さんこと川戸マツさんは今年 99 歳になりますがご健在で藤沢市にお住まいです。以前、お松さんに当時のことを伺ったことがあります。近所のおかみさんがうちの子も描いてやって下さいと劉生に頼みに来ると「絵のモデルというものは誰でもいいというものではなく、絵になる顔とならない顔があるから」と断るのを聞いて自分がモデルに選ばれていることがとても自慢だったと言っておられました。

しかし村娘於松を描いたのは大正 11（1922）年までで、以後描かれていません。劉生の日記には 11 歳になったお松さんについて、だんだん大きくなって顔が平凡になり、あまり描く気がしなくなったという意味のことが書いてありますが、お松さんの記憶では半裸になることを希望され、お父さんに「もう行くな」といわれたからだ、といいます。しかし、大正 9 年に麗子の半裸の絵がありますし、雑誌「白樺」の大正 9 年 1～6 月号の表紙の絵は於松半裸像が木版で印刷されていますからその前年、大正 8 年には於松半裸像を描いていたことになります。

また大正 10 年 7 月の日記には 3 日連続で於松半裸像を描いたことが記されています。残念ながら絵は残っていません。ですから、お松さんのお父さんはだんだん大きくなる娘の裸像が描かれるのを心配して「もう行くな」と言われたのかも知れません。また、麗子の著書には丸山行雄と横堀角次郎がお松さんに来てもらって二人で描いていた（大正 11/3/25「丸山、お松をはじめたとか」劉生日記）のですが、これは着衣のモデルだったと思われます。が、たまたま何処かの小学校の先生が、女生徒にいたずらをしたことが新聞に大きく報道され、それを見た

お松さんのお父さんがもう明日からモデルに行ってはいけないと言い出し、お松さんが断りに行った。丸山は当時、鵠沼小学校の先生でしたから、その「記事に立腹したがどうにもならず、それで於松のモデルもすっかり終わりになったのである。」と劉生日記に書いてあります。お松さんのお父さんは大正 11 年 8 月に亡くなっていますから丸山、横堀に関してはそういうことになったのでしょう。

しかし劉生の作品年譜を見ますと、その年の 10 月まで於松の作品がありますから、父寅吉さんの死後も時々モデルに来ていたことになります。

「お父さんの死後、しばらくして、お松さんの一家は鵠沼を離れることになり、お松ちゃんとはそれきりになった。」と麗子は書いていますが、翌 12 年 3 月に劉生はお松さんの弟「正ちゃん」こと葉山正吉（当時 9 歳）をモデルに描いています（絵は現存「三甲美術館蔵」）から、じっさい葉山家が鵠沼から藤沢に移ったのは大正 12 年 4 月以降、震災までの間のことのようであります。

次に多いのは「坊ちん」こと田中信行でしょうか。信行は劉生の妻の次姉、蕗の一人息子で、当時、劉生の家にほど近い八軒別荘（弟子の椿貞雄も）に住んでいました。一時期この甥を預かっていたこともあって劉生はこの甥をとても可愛がっていました。幼い子供にじっと同じ方向を見させるのにガラス窓の桟にお菓子を吊るしてそれを見させたりして工夫しています。坊ちんは大正 11(1922)年 8 月 12 日鵠沼で疫痢にかかり死亡してしまいます。当日の日記には「今日の事を書くのは嫌だ。信行はとうとう今日逝ってしまった。可憐な子供だった。思うと悲しく淋しい。ああ、ちい姉さん（妻の次姉、坊ちんの母、蕗のこと）は、本当に堪るまいと思う。いじらしい子供、何という淋しい悲しいことであろう。…という書き出しで始まり、入院から死亡までのいきさつが詳しく書いてあります。絵のモデルの話に戻りますが、

それから照子です。照子は劉生の 5 歳下の妹で、やはり体を悪くして（腹膜炎であった）、兄の所に同居するのですが、体調が回復した後もずっと一緒に暮らし、関東大震災で家が潰れた時も一緒でした。劉生は彼女のことをとても愛していたようです。

あと、家族では、義母、当然のことながら妻を描いていますが数は多くありません。鵠沼に来る前には沢山妻を描いていますが。

また、女中や書生など同居人も描いています。女中では最初に来たイチを、書生では岡崎精郎、丸山行雄、小林欽夫を描いています。同じ書生でも棟方寅雄の

絵はありません。そのかわり棟方は、絵日記のなかではしばしば登場します。それをみると棟方の顔はマンガチックで、どうにも描く気がおこらなかったのではないかと想像されます。

友人、知人では川幡正光（草土社同人）、河野通勢（草土社同人）、芝川照吉（パトロン）、内藤琪土夫人、原善一郎（パトロン）、1）2）について松本長十郎、長与善郎（白樺同人）の茂子夫人、喜多川富良（色刷会会員）、など。

また、自画像は鵠沼時代になっても、数多く描いています。

日本画について

劉生は、鵠沼滞在中に、だんだん東洋の芸術に関心を強め、中国、特に宋や元の時代の作品や朝鮮の書画や美術品、日本の浮世絵、日本画、歌舞伎、能面などの見聞を広めます。そして自分でも日本画の制作を始めるのであります。膠を煮たり、胡粉を練るのは日本画を習ったことのある蘂の役目でした。日本画は座って描くので2階の書斎か8畳の座敷で描きました。たまにアトリエに毛氈を敷いて描いています。きっちりと描いた静物画（野菜や花）や南画風の墨彩です。ここでも麗子は常にモチーフとされましたが記憶画であってモデルをしたわけではありません。

画室について

第3週にお話ししました、初めて自分のアトリエを持った喜びも、実際に使ってみるとその狭さ、暗さがだんだん気に入らなくなり出します。

松本別荘に移ってすぐの蘂の明るい希望に満ちたあの日記の内容からは想像もつかぬほどに劉生はやがてこのアトリエに不満を持ち始めるのです。アトリエを借りる夢をみてその内容を日記に書いていますが実に具体的な内容の夢です。

大正8年8月7日の日記に、一昨朝起きる前に見た恐ろしい不気味な夢をここに録しておいてみる。忘れてしまうのも惜しいから。という前置きで見た夢の内容を紹介しています。

「何しろいい貸家があるという。西洋館で（余は洋館を仕事の都合上常に求めている）大きな立派な家だそうだ。そこで余と椿とでその家を見に行った。青い畑の間を縫うていろいろに曲がって歩いた。何となく淋しい心持もした。しばらくしていかにも場末らしい感じのする所へ出た。荒れた地面に雑草など生え、牛乳絞りのバラック見たようなペンキ塗りの平屋があって、活動小屋が大きく只一

つそのわきに建っている。

余はこの平屋のペンキ塗りがその貸家なのかと一寸がっかりした。そしたらそうではなく椿はどんどんその家の角を曲がって行く。しばらく行くと丁度その活動小屋の裏あたりの通りに面してきれいな暗緑色の二階建ての一寸大きい西洋館があった。そこが貸家なのだ。その家の前に小さい家があってそこの主人が差配なのだ。余と椿がその男に会って用談する。余は自分のナリを見ると紺がすりを着流している。椿は例の通りのカッコウ也。これはしまった。この男は俺たちの風姿を見て見くびって断りはしないかと案じる。せめて羽織でも着てくればよかったと思う。しかしその心配もなく、家賃は非常に安いらしい。(何でも起きてしまってから思うと三十円位の安さに思っていたらしい) その時は別にその安さに疑いを持たず兎に角二人でその家の入口の扉を押して入った。

入ると何となくひやりとした。余が帽子を取って掛けようとすると、椿が「この家は少し気味が悪いから帽子は取らない方がいい」という。余も気味が悪くなって帽子を再びかぶった。入口からすぐに広い階段になっていて、それが大理石で出来ている。これは素晴らしいと思い、二人してその高く広い階段を昇って行く、実際立派な家だ。全く安い。

階段を昇りきると二階の部屋に入る扉がある。何気なく余はそのハンドルを取って押し開いた。室は広い洋室で、向かって右手に広い突き出し窓があって、日光がカーテンを通してチラチラ差し込んでいる。しかし見よ。その突き出し窓の大理石の置台を一個の影が立ってわき目もふらずに拭いている。それは全く影だ、人ではない。人の影と同じものだ。

その影が立ってその台を拭いている。二人は顔を見合わせた。余はゾッとした。二人はそのまま黙って踵を廻らして室外に出て階を急いで降りて室外に出た。夢はもう少しあったがその恐ろしさで目が覚めた。」

というものです。劉生ははっきりストーリーのある夢を見る人だったようで、しばしばこんな夢を見たといっては、その内容を丁寧に書いていますが、ずっと抱えている画室に対する不満と、より広い画室願望がこんな具体的描写の多い夢を見させたのでしょう。

大正9年3月2日、鵠沼に別荘を持っていたヒュウザン会で一緒だった硲伊之助が渡仏の挨拶に松本別荘を訪ねてきます。劉生は早速、硲の東京のアトリエを借りる交渉をするのですが、これを借りることは出来ませんでした。

大正9年12月7日の劉生日記には 「…ああ画室はまだ当分駄目になった。

この小さい暗い、それでも三年前よりはずっとましな階下の画室にまだ当分は我慢して画を描かねばならないのか。張り合いの無い事だ。…」といった記述が出てきます。

その後も、貸家だったり、画室建設だったり、実際下見に行ったり、家の設計を妻と二人で考えたり、など、より広くて明るい画室を求めての記載が日記に続出しますが話だけで不調に終わったり、見に行っても気に入らなかったり、多少具体化しても今度は金策が調わず無為に終わったりします。

結局、アトリエ移転の計画は実行されず関東大震災で家が壊れるまで鵠沼に住んだ訳でありますが、小さく暗い画室であったが故に後世に残る幾多の「右向き麗子像」が生まれたのだとすれば彼の希望が満たされなくてよかったのかも知れない、と思うのは私だけでしょうか。

第5週（2010/12/21放送）

鵠沼のインフラストラクチャー

まず、交通手段ですが、遅い順に並べますとまず徒歩、次に人力車、当時は俥と言えば人力車でした。人遍に車と書いてクルマと読みました。和製漢字だと思います。江ノ電鵠沼駅前に俥屋さんがありました。鉄の車輪のものと、ゴムタイヤを履いたものがあり、ゴムのほうが乗り心地が断然よかったと私は義母から聞いたことがあります。

次にタクシーです。東京では円タクと言われていました。料金1円のタクシーです。上京の折には利用していたようです。藤沢ではどうだったでしょうか。昭和初期になりますと芥川の小説『歯車』に、鵠沼から藤沢までタクシーに相乗りする場面があります。

鉄道は江ノ電が通じていましたが、小田急江ノ島線はまだありません。小田急江ノ島線は昭和4年に開通しました。ですから松本別荘から最寄りの駅は江ノ電鵠沼駅で、　1 kmほど歩かなければなりません。東京へ出る時は江ノ電に藤沢まで乗って東海道線の汽車に乗り換えて行きます。

つぎに通信手段をみてみましょう。これも遅い順に行きますと、手紙、手紙はどれくらいの速さで届いたか、劉生の書簡集をみますと、鵠沼から東京まで丸二

日がかり位のようです。それより早く知らせたいとなると電報です。現在では慶弔電報ぐらいしか利用されません。当時の電報は、まず打つのに郵便局に行きます。そこで電文を書く用紙を貰い、片仮名で、電文を書き、局の人がそれを相手先の局にモールス信号で打電し、それを受信したら電報用紙に片仮名で印字して、郵便屋さんが相手先に届けるのです。一文字いくらですから電文は短いものと決まっていました。

一番早いのは電話ですが、鵠沼に電話が開通したのは大正9年です。劉生の居た時分の鵠沼では電話があるのは郵便局と金持ちの別荘、大きな商店にしかありませんでした。ですから掛けるのも、そういうところに借りにいかねばなりませんし、相手に電話がなければそれまでです。呼び出し電話といって電話のある家に掛けて伝言を頼むことになりますが、よくよくでないと一般の人は利用できません。劉生の家にも有田商店に電話をかけ用件を伝えてくれといった電話が掛かり有田さんのお婆さんが約700メートルも離れた劉生宅まで伝言に来てくれた。といった記述があります。

それから電気ですが、電気は普及していました。ただ、今のようにメーターがあるのではなく何燭光の電燈が何個あるかで値段を決めていました。停電は日常茶飯事でした。劉生の日記にもしばしば停電がでてきます。

ラジオはありません。ＮＨＫの試験放送は大正14年3月ですから。

次に水ですが水道はまだありません。高瀬弥一が鵠沼から江ノ島まで水道を敷いたのは大正15年のことであります。どこの家も井戸でした。鵠沼は地下水位が高く、一寸掘ればすぐに水が出たといいますから、ポンプをつけるまでもなくつるべ方式の家も多かったのではないかと思います。

排水はどうなっていたのでしょうか。生活用排水は溝を掘っただけの下水溝が池から池をつないでいて、それらは引地川か片瀬川に合流し最後は海に流れ込んでいました。また鵠沼は結核患者の療養地でしたから、その下水溝を患者が排出した痰が流れていたという誠に不衛生な話もあったように聞いています。

汚水、トイレの汚物ですがこれはみな汲み取り便槽でありました。浄化槽は大正10年代には商品化されていましたが、財閥の別荘ならともかく、一般への普及はまだ先です。

熱エネルギー、ガスは勿論ありません。炊事や風呂焚きの燃料は枯れ松葉や薪が使われました。鵠沼は松が多く松の落ち葉や松ぼっくりに事欠かなかったので

す。松は油がありますから火力が強く絶好の燃料でした。暖房は火鉢に炭です。劉生の家では和辻から貰った石油ストーブがありましたが石油は藤沢まで買いに行かねばなりませんでした。

そうした社会条件のなか、劉生宅ではどんな生活がなされていたのでしょうか。どんな備品があったかをみますと

備品：蓄音器（銀座十字屋で購入）、足踏オルガン（銀座山野楽器店購入）子供用自転車、石油ストーブ、天火（十一屋で購入）
冷蔵庫（氷屋が夏は配達に来る）、洋食器セット、コーヒー茶碗セット、電気マッサージ機（長与に借りる）体温計、氷枕、浣腸器、など

洋食：鵠沼以外で食べた洋食は除く。出前か、食べに行くか、家で作ったか。
コールドビーフ、メンチボール、シチュウ、豚ロース焼、ライスカレー、チキンカツ、チキンライス、鶏の丸焼、カキフライ、マスのフライ、マカロニ　ホットケーキ、トースト、コーヒー、アイスクリーム、ビール、ぶどう酒

洋装：劉生は鵠沼に来てから初めて洋服を着ます。妻の洋装は見られません。備品や食事の洋風化からみると、衣料の洋風化は遅れているといえます。背広を貰ったのをきっかけに、ワイシャツ、ネクタイ、カラー、カフスボタン、ズボン釣り、帽子、靴下、靴下止め、靴、セーター、レインコート、オーバー、ステッキを買い整えていきます。着るのはよそ行きの時に限ります。

遊び：インドアの遊び
かるた、花札、トランプ、五目並べ、テトリス、おはじき、おてだま
耳じゃこ、座り相撲、足相撲、オランダ相撲、腕相撲、腕押し

習事：長唄（一家で習う、師匠の出張教授）

運動：散歩、相撲、海水浴

ペット：カナリヤ、紅雀、鳩（ただし日本画の画材用に飼育）ねこ

こうして見ると備品は大変進歩的であります。蓄音機で掛けるレコードは買ったり借りたりですが、比較的ポピュラーなクラシックの器楽、声楽、長唄、芝居、講談、落語といったものを聞いています。

オルガンは 15 歳のころ、数寄屋橋教会で日曜学校の先生をしていた時に習い覚えたのでしょう。弾いていたのは主に讃美歌でした。

父、吟香が洋食を好んで食べたことは第１週にお話ししましたが劉生も幼少時から洋食に親しんでいたのでしょう、鵠沼の田舎に来て天火（オーブン）を購入しています。

さて劉生と地元の商店とのおつき合いはどんなだったのでしょうか。

大正９年に有田さんが洋食屋を始めると、早速、劉生宅ではよく利用するようになります。ローストビーフを取り寄せたり、ライスカレーやアイスクリームを食べたりしています。大変うまかったと書いています。有田さんは当時八百屋も経営していましたから劉生はここで静物画に用いる林檎や唐辛子なども手に入れています。あと、商店街にあったお店として、日記によく出て来るのが鵠沼饅頭でしょうか、これは鵠沼庵というお饅頭屋さんで八百徳さんの前にありました。それから斎藤百貨店、ここでは、いろいろな文具を買っています。今の天金通りにあった高木建具店には絵絹を張る枠をあつらえたり、板に描いた油絵が割れてしまったのを継いで貰ったりしています。旅館東屋で会食をしたりビアホールに入ったりもしてします。同じ旅館の中屋には弟子の横堀や丸山が間借りしていましたから、ここにも出入りしました。また家に近いところでは植文という植木屋さんが、風呂屋や駄菓子などを売る店もやっていたので、ここでビールなども買っています。あと、玉寿司というお寿司屋さんからお寿司やウナギの出前を頼んでいます。玉半というのは割烹料理屋さんだったのでしょうか、てんぷらやおせち料理をとっています。そういったお店は鵠沼にとどまらず、片瀬の八百屋の甲州屋や氷屋、藤沢の髪結床や石油屋さんも日記に登場します。

もともと、病気療養に鵠沼に来たくらいですから、医者との付き合いも当然発生しますが、日記を読んでいて思うのは、実に病弱というか、劉生も、麗子も、妹の照子もしょっちゅう医者にかかっています。熱が出たり、お腹を下したり、胃がもたれたり。

東屋に併設されていた鵠沼海浜病院の福田医師、高松医院の高松医師、山野井医師、富士山医師までは鵠沼のお医者さんですが、サナトリウムをもつ鎌倉の鈴木病院の副院長鈴木哲夫博士、片瀬の佐々医師、藤沢の徳山医師、小池医師などにおせわになっています。

つぎに日記に現れた年中行事について調べてみましょう。

先ずお正月。床の間にお鏡を飾り、玄関には裏白と橙の飾りが飾られます。皆

目出たく年を取り、トソ雑煮を祝う。と日記にあります。かるたなどして遊ぶ。「於松がお正月の着物を着てお下げに結うて羽子板持って遊びに来る。余はピンポンのように羽根つきをするのがうまい」などと書いています。「三河漫才が訪れ、舞を舞い、唄う。麗子二階より駆け下り喜んで見る。怖いものだと戯れても面白さに見るを止めず。鵠沼に住みてかかるもの子供にとりて珍しきは当たり前ならんと思う。あとにて麗子漫才が鼻の穴を大きくしたり小さくしたりしたと言いて皆を笑わす。夜は於松も一緒に大人たち椿や丸山など大勢でミカンをかけて双六をした。」楽しいお正月の団らんのひとときです。昔は皆沢山お餅を食べたようで1月3日「餅をまた十食べたので腹がくちくなったので丸山と散歩に出て、斉藤の脇の道を通って尼寺にでた。」

またとありますから元旦二日も沢山食べたに違いありません。

七草、1月7日七草を刻んだ雑煮を祝います。「本当はカユなれど家にては雑煮が好きなればかくの如くす。」と書いています。

2月、節分豆まき、「椿が年男なれば椿を呼んで豆まきして貰わんかなどいいしも、夜の事にて気の毒なりけん。照子代わりて豆まきす。麗子大喜びする。」一握りで丁度自分の年の数だけ豆をつかむといった遊びもしています。3月雛祭り、一週間前の2月27日、床の間に五段飾りのお雛様を飾る。3月2日畳替え。「4月1日、9時45分離床、下へ降りたら蓁が御池から大きなコイがはねたと騒す。エイプリルフールなり。麗子も一緒になって他愛ないウソをつきずめで少しうるさかった。」いつごろからエイプリルフールが定着したのでしょうか。5月端午節句飾り、これは坊ちんを預かっている間の事です。菖蒲湯も立てています。6月蚊帳を吊る。7月海水浴。劉生は泳ぎが不得意だったので、余り海に入っていません。海水浴の場面のスケッチではたいてい膝ぐらいの深さに立っています。

お座敷の障子を外して簾掛けをする。大正6年の8月2日には雨乞竜を見物、その様子を妻の日記にスケッチしています。この雨乞竜の行事は昭和になると急速にすたれてしまったそうで、このスケッチは岩波の劉生全集の月報にしか紹介されていませんからご存知の無いかたが多いでしょう。行事の再現写真はありますが当時の雨乞い行事の写真は見付からないのだそうで郷土史的にも貴重なスケッチといえると思います。

8月7日鵠沼のお祭り。「道で子供が赤い提灯つけて八百由が先達でおみこし担いで来るのに会う。なかなか美しい。お祭りのところは五六軒露店が出ていてアセチリンガスをつけて近所の子供や何かが出ているが、いかにも田舎のお祭りで

少し淋しい。」と日記にあります。これは江ノ電鵠沼駅前の賀来神社のお祭りだろうと思います。8月15日「片瀬川に灯篭流しを見に行く、電車で山本橋まで行き灯篭流しを見たがなかなか美しい。大きな四角な灯篭を太鼓の音とともに水に流し一人泳いでそれを流したりしていた。」灯篭流しは劉生の絵心をそそったと見えて、油絵で描いたことが日記に出てきます。それは「片瀬江ノ島灯篭流し施餓鬼の図」という6号サイズの作品で1921年に描かれましたが、1918年にエンピツ素描したものを元にエスキース風に油でやってみたのです。灯篭流しは毎年のように見に行っています。9月障子の張り替え。10月麗子の学校の運動会。11月記述なし。12月、柚子湯、クリスマス、29日は餅が出来て来る。お鏡とのし餅と桶に入ったからみ餅の絵が描いてあります。「これで正月の用意が出来たわけ、もう後二日しかない。女どもは階下のガラス障子を拭いていた。汚れが取れると誠にきれいになった。」といった具合であります。

外出と来客

日記を読んでいて感じるのが外出の多さと来客の多さです、こんなに来客の多い家は珍しいのではないかと思います。日記は鵠沼に来た頃よりは、社会的にも知名度が上がり、経済的にもゆとりが出来てきた大正9年からですから、交友関係も当然広がってきていますし、上京や旅行に出る機会も当然増えてきます。

どのくらいの来客の数と外出日数かといいますと大正9年は年間延べ471人、外出日数194日。大正10年は来客501人、外出191日。大正11年は来客704人、外出131日。私が日記からザッと拾った数です。これには3日にあけず訪ねてくる椿や横堀、丸山といった劉生を師と仰ぎ自身も鵠沼に移り住んだ連中や、モデルのお松や、稽古をつけにやってくる長唄の師匠なども含まれていますから、ほんとうに客とは言えない人を含んでいますがそれにしても大変な数です。しかも、親戚や草土社の仲間たちは来ると数日から十数日にわたって泊って行くのです。多い時は数人の泊り客、そうなると雑魚寝です。

それでどんな人たちがここを訪れたかといいますと以下、どなたも知っていそうな有名な人をピックアップしてみましょう。

まず、白樺の同人たち、武者小路実篤、志賀直哉をはじめ小泉鉄、バーナード・リーチ、柳宗悦。長与善郎、千家元麿、園池公致。長与、千家、園池の三人は鎌倉に住んでいましたから特に往来が激しかった。なかでも長与は鵠沼移転の資金を出してくれたし、愛弟子の椿貞雄が長与の奥さんの妹を見染めて結婚し、劉生

のすぐそばに住んだから特別でした。そのほか、やはり鎌倉にいて、白樺の影響を受け、優れた短編小説を書きましたが、のち父毅（たけし）を助けて政界入りした犬養健（たける）。作家では佐藤紅緑や広津和郎、倉田百三。学者では哲学者の和辻哲郎、東大で法律を教えていたステルンベルヒ。のちに最高裁判事になった澤田竹治郎、とくに澤田は劉生の筋向かいに越してきて知り合い、足しげくお互いに行き来しました。

劉生は文章も多く発表しています。また本の装丁を多く手掛けています。ですから、出版関係の人々も当然、訪ねてきています。岩波書店社長の岩波茂雄、改造社社長の山本実彦、叢文閣創立者の足助素一、婦人公論の美人記者として知られた波多野秋子、この人は劉生を訪ねた2ヶ月後に有島武郎と軽井沢で心中死して世上を騒がせました。その他、多くの出版社の人たちが出入りします。

また、彼の絵のファン、パトロンとして、政財界人では鵠沼の劉生のアトリエまで足を運んでいる人に、芝川照吉、この人は大阪船場でラシャ問屋を営む実業家でした。それから横浜三渓園をつくった原富太郎（三渓）の息子の原善一郎、娘婿の西郷健雄、住友財閥の住友吉右衛門の長男の寛一、この人も劉生のコレクターとして有名です。実業家、松方幸次郎が集めた松方コレクション、今、上野の国立西洋美術館に収蔵されていますが、それをフランス政府から返還させた幸次郎の弟の松方三郎、この人は登山家、ジャーナリストとしても有名であり昭和27,28年、出版された『劉生絵日記』の編集、解説を担当した人です。また、のちに日本ボーイスカウト連盟会長になった三島章道なども鵠沼の劉生宅を訪れています。

美術家仲間ではどんな人々が訪れたのでしょう。

まず超有名なところでは彫刻家というよりも詩人といった方がよいでしょうか「智恵子抄」を書いた高村光太郎。彼とはヒュウザン会以来の付き合いです。つぎに梅原竜三郎。彼は劉生に春陽会に入らないかと誘いに来ます。劉生と草土社のメンバーはいわば客人扱いで春陽会に入るのですが、劉生の我の強いところが他の会員の反感を買い結局劉生は春陽会から追放されるのです。そんな人物を誘った責任から梅原も春陽会を止めざるを得なくなるのです。ヒュウザン会以来の付き合いといえば茅ヶ崎にいた萬鉄五郎。鵠沼に別荘があった硲伊之助。「白樺」に「ミケランジェロの手紙」を翻訳し、晩年鎌倉に住んだ彫刻家の高田博厚。私が高田博厚から直接に訊いた話ですが、ルノアールを認めるか認めないかで初対

面で大喧嘩になりそれっきりになったが、書簡のやり取りは続いたようです。木版師の伊上凡骨、高見沢遠治。それから劉生が率いていた草土社のメンバーが出入りするのは当然としても、若い彼らはほとんどが貧乏で、劉生の家に来れば、何日でも逗留するのです。そのなかで一番有名になったのは後年、真鶴半島に住んだ中川一政であります。真鶴にある中川一政美術館にお出でになった方も多いと思います。つぎに愛弟子と自他ともに自認していた椿貞雄、椿は大正9年2月1日劉生の家からわずか2～300mの所に移り住んで、もっとも多く劉生宅を訪れたのは椿に違いありません。大正9年の劉生日記では毎日のように時には一日に何度も二人の間での行き来があります。庭に土俵を作ったのも椿の方が早く、相撲を取りに劉生の方から遊びに行くこともしばしばでした。次に鵠沼に移り住んだのは、横堀角次郎で彼は植文に間借りしたり、中屋に間借りしていました。丸山行雄はやはり劉生を頼って鵠沼に来ましたが、劉生の口利きで鵠沼小学校の美術教師の職を得て、これも植文に間借りしたり、劉生宅の書生をしたりしながら絵の勉強をしました。その他草土社では最も古い友人、清宮彬、木村荘八、信州の河野通勢、名古屋の片野元彦。その他、柏木俊一、川幡正光、高須光治、田村憲、土屋義郎、中島正貴、宮田秀吾といった面々です。

あと、客ではありませんが、この家で書生をした岡崎精郎、棟方寅雄、小林欽夫がいます。岡崎の家は大地主でしたが、故郷で農民解放運動に奔走しました。

第6週（2010/12/28放送）

関東大震災遭遇とその後

劉生一家は鵠沼松本別荘で関東大震災に遭遇し、克明に記録しています。

災害当時の一般の様子もわかるので少し詳しくご紹介します。

9月1日（土）雨のち晴れ

今日という日は実に稀有の日である。恐らく安政以来の大地震ともいうべき大地震であって、湘南、横浜東京を一もみに潰したのである。この日は、朝のうち仕事に掛らず、蘂と茶の間で花合わせなどしていて余が負けて、すこし癇癪などおこしているところであった。12時少し前かと思う、ドドドンという下から突き上げる様な震動を感じたので、これはいけないと立ち上がり、蘂も続いて立って

玄関から逃れようとした時は大地が揺れて、なかなか出られず蓁などは倒れてしまった由、とも角外へ出ると津波の不安で、松本さんの方へ駆け出そうとすると照子が大地に投げつけられ、松の木で眼をやられたとて蓁がかかえて血が流れている。あゝ何たることかと胸も張り裂けるようである。家はもうその時はひどくかしいでしまった。もう鵠沼には居られないと思ったがすぐ、これでは東京も駄目か、大変なことになってしまったと思う。津波の不安でとも角も海岸から遠い高いところへ逃れようと傷ついた照子を蓁がかかえて麗子は小林がおぶって一時購買屋の所で落ち着いたが不安なので山へ逃れようと行く。横堀が後から来たのには助かった。横堀に照子を任せて逃れる。田のなかに腹まで浸かって逃れ来る。地面が揺れ、割れて、あぶない。電線が、低くなっていて電気が通っているかもしれない。実に不安である。やっと逃れて、藤沢の遊行寺か、武相へ行こうとしたら、途中、石上のお百姓家へ呼び込まれる。非常に親切な家で、実に助かった。鈴木という米屋さんで、今の世に珍しい人々の家族だ。この家の事は永く永く忘れまい。再生の恩人である。照子を寝かし冷やしてやる。とも角も地震が不安なので地面に板を敷きござを敷き、夜は蚊帳をつってくれる。横浜は全滅、東京も駄目などの非報くる。西郷さん達、原さん達、三渓園の無事を祈る。照子の眼、心配なり安全を祈るのみ。あゝ今日は実に何という日であったろうか。只々神に罪を謝し、御守りを祈るのみである。

9月2日（日）晴

明け方、螺子工場がやける。不安なり。じき村の人たちによって消されたが、揺り返し津波の不安去らず。小林、横堀、鵠沼へ行って見て来る。昨日の時間に少し大きな揺り返しあり。不安のうちに過ごし合掌し神に祈る。照子の眼を見て貰うため照子連れて藤沢へ行く。小林も同道なり。小池さんというお医者様に行く。照子の眼の安全を祈りつつ聞いたら眉毛のところを切っただけで後は打撲のあざがあるのみ、眼は安全の由、只々感謝の外ない。石上に帰る。午後より朝鮮人が暴動を起こしていて攻めて来るという。恐怖に恐怖なり。米屋と思われてはと言うので炭俵を裏に運ぶのを手伝う。家の裏に丸太とトタンにて仮小屋を作り床を作りゴザを敷く。鮮人の不安ますます強く、金をうずめようとか、食品をかくそうとか、いざという時どこに隠れようとか、また小林などは防がねばならぬ故とてモリや刀などの武器を出したり、夜に入ってもますます不安なり。

あゝ神よ守り給え。照子の眼の助かっていたことは万一の幸いと思っていたこ

とで実に実に感謝の外ない。神よどうぞお守り下さい。しもべたちの運命と幸福、人々の幸いをどうぞ御守り下さいまし。

9月3日（月）強雨あり

朝早く目覚める。石上の鈴木方の裏の野天に作った仮小屋のなかなり。朝食後（白米握り飯を作ってくれるがもったいない気がする）藁、小林、横堀たちと鵠沼へいろいろ取り出しに出かける。鵠沼はなかなかひどく潰れていた。二三日前写生しようとて歩いたところが、ひどく崩れている。松本さんでは門の所へトタンの屋根を作りゴザを敷いて住んでいられる。お茶を貰う、大変うまし。壊れた家からはいろいろ潰れたと思った惜しいものが完全または不完全で出る。蓮杖作の父の像や、支那の籠、麗子の玩具など出る。二階へ丁度来ていた八百徳が上がってくれて軸を出したが皆完全、神よ守り給え。これを安全に持つことが出来ますように祈るものである。藁や余のいい着物を箪笥から出していたら雨が降って来て画室へ入れる。雨がだんだんひどくなり少し荒れ模様となる。五号の家に皆避ける。ようやく雨も上がりかけたので丁度、夏トンビと、雨コートが出たのでそれを着て石上へ帰る。石上ではトタンの小屋をこわして、母屋の方に入っていた。晩飯後はやく床に入ったが屋根の下へ寝る不安で眠れなかった。神よ守り給え。あゝ神よ守り給え。不安なり。兄弟親類、小林の母姉たち子供等、友人、木村、清宮などの安全を祈る。神よ守り給え。神よ守り給え。

9月4日（火）晴

石上の鈴木氏方にて目覚む。地震以来四日目なり。昨夜は不安にてよく眠れず。あれ以来初めて屋根の下で寝たるなればなり。それにこれからの事が心配にて心暗くなる。神よ守り給え。まだまだ地震、津波の心配とれず、只々神様にすがるよりない。飯を済ます。鈴木方では米の飯を呉れてよくしてくれる。感謝に堪えない。横堀に食料を買って来て貰い、藁、麗子、小林、横堀にてまた鵠沼の家へ来る。二宮さんへ藁と行く。二宮さんでは温室と物置が潰れなかったのへ丸太と戸板で床をして畳を敷いて住んでいられたが結局、物置の方をかたずけて床を作り拝借することになる。石上にそう居るのは気の毒なのと鵠沼にいれば地震津波がなければ帰って気丈夫なのとでなり。神よ守り給え。宮様の金井さんへ見舞いに行って来る。それから、二宮さんのお父様と小林と余とで物置に入って地震のために壁などのおちているものを片付ける。シャベルやくわで働く。それから壊

れた母屋の中に入りこれも壁などの落ちている畳を上げて運ぶ。仕事中、照子、麗子が石上で土地のものを収容しなくてはならぬというので、ことわられたとて来る。もっともの事なり。石上の人たちには全く、深く深く感謝し、この恩は忘れたくないものと思う。

蓁、小林、横堀、石上に行き食料その他のもの持って引き上げて来る。松本さんで湯を立ててあってそれに入れたのは全く思いがけなくて助かった。鮮人の恐怖はまだ全くは去らぬ由、購買の小僧とかが高砂で鮮人におそわれ、だましてその手を切ってようやく逃げて来たとか、不安なり。神よ守り給え。その他、社会主義や悪化した人々などの害のないように祈るものである。神よ守り給え。

9月5日（水）晴

夜来より朝まで微弱ながら地震あり不安未だ去らず。二宮父子は東京と横浜へ早朝に出立。蓁たち早く起きる。余は眠いのと心が沈むのとで皆より後まで寝ている。起きて壊れた宅のほうへ行く。蓁、照子、小林など壊れた家からいろいろ出している。下駄、ステッキ、洋傘など出る。八大山人は横堀が外へ出して置いたために、濡れて汚れてしまったが助かると思う。便所は二宮さんのが壊れていないので画室より桜紙をたくさん出したので初めて心地よく便あり、しかし少し下っていた。用心しないといけない。東京では社会主義者と労働者が事をなしているとか、不安なり。（中略）疲れと気の沈むのとで仮居に横になりうとうとと眠る。日記帳や原稿紙、万年筆、その他出たので日記つける。三十一日からついていなかった。この先の事不安なり。神の守りにすがるよりない。神よ守り給え。

夕方、西洋館の二階へ梯子掛けて覗いてみたらひどく散乱してはいたが、麗子のクレイヨンの帳面など出してやる。雨の漏らぬようにして帰る。

9月6日（木）晴

夜来地震度々あり、不安なり。神よ守り給え。七時過ぎ起きる。天気はよけれど弱き地震、刻をおきてあり、何事も無き事を切に祈る。朝食は米飯と卵をいただく。贅沢の事なり。午前、蓁、澤田さんの細君の妹らと有田の方へ買い物に出る。有田では怪我した人はあったが皆助かった由、よかったと思う。洋食店の方は潰れていたが八百屋の方はまず助かっていて商売していた。赤い生姜、平野水たくあんなど買う。メリケン粉も一袋四円十銭で売っている。有田に体量器があったので体重を測ったら三百匁ほど減っていた。郵便局に行き為替の事聞いたら

鵠沼局の払いの分は当分駄目の由、何とかなるといいと思う。何しろ金が今は大切だ。この点も幸いを祈る。神よ守り給え。飛行機飛来、ビラをまいて行く。朝鮮人はおさまった由安心なり。軍隊出動ある由感謝す。郡役所で安く食糧を支給する由ビラなどにて。大いに安心す。午後にも時々地震あり無事を祈る。松本さんで風呂を御馳走になる。遠雷、時々鳴る。今日は大分気持も落ち着いた。あゝ神よ守り給え。

9月7日（金）晴強雨あり

七時前起きる。昨夜も時々地震あり。地震と津波の恐怖まだ全く去らず。無事を祈る。今日は、潰れた家の中から先日出して雨にあってまた入れた箪笥の着物その他の道具を出し、画室を片付ける。裸になり帯を褌にして（下帯がないので）画室に入ってゴタゴタになっているものを出し、落ちた壁を外へ捨てる。そのうちに雨がまた降り出したが次第に強雨になり裸のままずぶ濡れになって出したものをまた画室に入れる。藁、大おこぼしなり。蝶貝の戸棚や紫檀の机を仮宅にはこぶ。蒲団が大分出たが購買組合から自転車の後ろに付ける車をかりてそれで運んだりした。今朝早朝、床屋が来てコメは山口屋の脇で支給するから安心せよ、鎌倉に海賊あり、皆用心せよとふれて歩く。朝のうち、片瀬の写真屋が通って購買組合を聞いたのでそれと分かり、壊れた宅の前と二宮さんの仮居の前と、写真二枚づつ写して貰った。

以上、地震から1週間の日記ですが、当時の様子が実によく分かります。地割れがし、腰まで泥田に浸かって逃げるところは液状化していたのでしょう。毎日続く余震におびえ、デマ風評の類におののき神に祈る。一方、温かい住民同士の助け合いや、壊れた建物から無事な品々が見つかり、神に感謝する。

そうして9月16日にいよいよ鵠沼を離れることになります。
まず鵠沼から藤沢の駅まで徒歩で向かいます。藤沢から上りの汽車といっても貨物の箱であったようです。それに乗って大船まで行き、横須賀線に乗り換えます。汽車が連結しているのは今度は無蓋車で、それで田浦まで行きます。田浦から横須賀まで一里以上歩かねばならず歩いていたら車があって皆それに乗れました。幾つかのトンネルを越えて横須賀に着きます。横須賀の被害はかなりひどく、さびしい気がした。横須賀の知人、所宅に身を寄せ、早朝に立った荷物を積んだ牛車の到着を待ちます。所の紹介で傍の酒屋さんに一泊させて貰います。

翌17日の朝、5時出発の船で清水まで行きました。船は12,000トンほどの「関東」という名の特務艦で一晩を船中泊。18日、午前5時には清水港に入っていたといいます。和船のはしけで清水港に上陸します。清水からは偶然、自動車があり静岡まで行き、そこから汽車で名古屋まで向かいます。名古屋在住の草土社同人、片野元彦のもとにひとまず落ち着きました。20日には夫婦で京都に家探しに行きます。そして29日に京都の内藤琪土の家に移ります。そこで10月1日に尾高鮮之助から長い手紙を受け取りました。それには「25日、あらしの中鵠沼に行ってみた。西洋館が傾いて淋しく立っていて、そばにトランプのクラブの7と花札が散っていた」と書いてありました。何となくその後の劉生の運命を暗示しているような光景です。

京都以後、死に到るまでをざっとたどりましょう。

10月3日に京都南禅寺草川町に家を決め引っ越ししました。その日の日記の終わりに神よ、この新しき生活の門出をお祝い下さいまし。と書いています。翌朝、ライオンの咆哮にびっくりします。動物園のすぐ隣だったのです。水道のある家に住むのは所帯を持ってから初めてだと記しています。

21日に震災後初めて油絵を描く気になり、31日には鵠沼から家財が届き、やっと落ち着きます。落ち着いて来ると骨董屋漁りを始めます。陶器の陶に雅（みやび）と書いて陶雅堂という雅号を用いて得意になっています。また海の鯛、魚の鯛ですがカイタイ先生などと称して買いたいものがあると何が何でも買いたくなる。またお茶屋遊びを覚え、たちまち、お金に困ります。収入の方はさっぱりで、震災前に倉田百三から借りた金が返せず、改造社に印税の前借を企てたりします。勿論借りるのに失敗しますが。

「父は父で殆ど毎晩茶屋酒にひたり、月末、金が入らないと、それでまたヤケになって大酒して暴れるのだった。そんな時の目の据わった父の形相の恐ろしさを今でも忘れることは出来ない。」一方、妻の蕖は「母は母で女盛りを美しく着飾り、取り巻きの若い連中と京の名所旧跡を訪ねて遊んでいた。家の中に暗いじめじめした影はなかった代わりに、家庭らしい雰囲気というものも薄かった。大体京都に住んだ時から家の中は他人の踏みこまぬ場所のない、あまりに隔ての無さ過ぎる家になってしまっていた。」こんな状況では落ち着いて絵が描ける訳もなく、それでいて劉生は画壇の誰をも認めなかったものですから、前にも申しましたが大正13年10月春陽会の梅原の推薦で草土社の会員は特別会員に推され入会しま

すが大正 14 年 3 月、第 3 回展のあと、劉生は春陽会から追い出されるのであります。その時彼と行動を共にした、もと草土社のメンバーは椿貞雄只一人。劉生が同志あるいは子分と思いこんでいた木村荘八、中川一政、清宮、河野らは彼と袂を分かったのです。これは劉生の自尊心をひどく傷つけたようで孤独感を強め、さらに飲酒に走らせる原因となりました。

鎌倉には大正 15 年 2 月に引っ越してきます。劉生はなぜ鎌倉に移ったか、理由は、はっきりしてはいません。が、おそらく京都での耽溺生活が行き詰ったからであろうといわれています。いろいろ物を買って借金も溜まりお茶屋の支払いも滞っている。彼は金を作るのに心労し、無理に無理を重ねました。ここらで心機一転、再び東京近くに戻り、かつての鵠沼時代のような制作一途の気持ちに返って、生活を立て直したかったのでしよう。

鎌倉の家は長谷 1422 番地、6 畳 8 畳 4 畳半 2 間。もとは華族が建てた古い家で敷地は 300 坪ばかり、庭には白梅の老木や紅梅の若木、木蓮や椿などがあった。それらは皆自然な感じで、こせつかぬ、いい庭だったと麗子は書いています。

しかし、早速京都時代の遊び仲間が現れ、新橋のお茶屋に連れ出されます。京都時代に着いた遊び癖は、結局は治らず、金がないから遊ぶ店も二流三流どころと落ちて来る、それでも、なお借金を作って飲み続けるのです。どうにも金の欲しい劉生に、松方三郎が大連行きの話を持ってきました。これは満州鉄道の招待であったので、喜んでその話に飛び付きます。満鉄が内地から画家を招聘するのは例年の習慣で、文化人を呼ぶのは宣伝的意味合いがありました。満州に来てもらって、スケッチぐらい描いて内地で紹介して貰うという程度のことでありました。満鉄幹部の肖像を描き、その金でフランスに行きたいという劉生の目論見は、最初から両者の考えに食い違いがあったのです。劉生はフランスの画壇に俺が絵を教えに行くのだと周囲に吹聴していました。フランスに留学するのでなく、フランス人に本当の絵を教えるのだというのは彼独特の、強がりですが、本音は、丸善に輸入される図集でしか知らない西洋絵画の本物を見たい。フランス帰りの連中に頭が上がらない。また国内で画会を開いても売れ行きは、さっぱりなので、ここらでフランス帰りという勲章が欲しかったのだろうと私は推測しています。

昭和 4(1929)年 9 月 29 日、田島一郎を連れて神戸から満州に出かけます。10 月 3 日大連着、11 月 27 日、大連を離れるまで、約 2 カ月弱、肖像画の注文は一人もなく、大連のお医者さんの永原織治の世話で画会を開き風景や静物を 13 点

描いて出したが、ほとんど売れない。この時の絵は劉生帰国後、永原は苦労してさばこうとしたが、はかばかしくなかったといいます。満州行きは散々な結果に終わったのであります。

傷心の劉生を乗せた船は下関に着き、同行した田島は劉生を山口県徳山の自分の実家に連れて帰ります。12月2日のことでありました。田島家は徳山の素封家で、徳山で画会を開いてくれるという誘いに乗り、土地の文化協会主催の日本画と洋画の会で、要するに売り絵を描かされたのでありますが、金の欲しい劉生は喜んで描きました。土地の人が次々と招待するので劉生は酒を飲みはじめます。

あっという間に深酒になり、ここで発病するのです。11日、静物を描いていて眼がかすんできました。翌日はもっと目先が暗い。14日に心臓が苦しいと訴ったえ、16日、眼の原因は腎臓の衰弱と診断されました。18日になると視力はますます落ちましたが、話しぶりは通常と変わりなく元気そうだったのですが19日、午後から苦しみはじめ、入院を勧められ、やっと翌日の入院を承諾しますがその晩、昏睡状態になりました。医師の見立ては尿毒症の突発。やがて危篤状態になり10名の医師が努力しましたが吐血したのを最後に12月20日午前0時30分、38歳の生涯を終えました。妻蓁と娘麗子は危篤の知らせに急遽、徳山に駆けつける車中で悲報を受けました。

こうしてみると、鵠沼時代が劉生にとって家庭的にも経済的にも安定し最も充実した仕事をした一番輝いた6年間だったことがよく分かります。

おわりに

「純粋な画家論だけからは、その作家の復元は出来ない。作品と画家の生活とは常にコインの表裏である。」と松本清張は『岸田劉生晩景』に書いています。

生活を知るには、本人の性格はもとより、その人格形成の時代、社会構造、世相、経済、家庭、対人関係、地域、住環境を知る必要があります。鵠沼時代の岸田劉生の生活を知る上でこの清張の手法を参考に「劉生の住まいの復元」のみに留まらず、その「生活の復元」を今回の講座で試みて見ました。コインの表側、つまり作品については何度も開催される展覧会で実物が鑑賞できますし、その芸術的価値については多くの評論があります。ですから私はもっぱらコインの裏側のご紹介をしたつもりですが、いかがでしたでしょうか？

「岸田劉生と鵠沼」は以上で終わります。　ご清聴有難うございました。

（おかだ　てつあき）

坂の街・個性の村 ——「馬込文士村訪問記」

安藤　公美（会員）

六月中旬の火曜日、早朝の豪雨が嘘のように上がり、真夏と思しき炎天の中、男性9人、女性6人総勢15人で馬込を訪れました。本日の文学散歩決行は、まことに英断といえます。坂の多い土地柄ゆえ、汗の量も半端ないものでしたが、得たものも膨大、充実した半日となりました。

案内は、大田区立郷土博物館友の会会員の土岐臣道さん、馬込文士村ガイドの会会員の竹馬（ちくま）ちえこさん、島田貴子さんの三人です。土岐さんは鵠沼を語る会の会員でもあり、今回の企画の立役者。地図パンフレットの入手、コースの設定、博物館の予約、案内役、アシスタント手配、食事場所の段取りなど、何から何までお世話になりました。大田区立郷土博物館では、学芸員の岩崎みどりさんより、丁寧な説明をいただきました。この場をお借りして、お世話になった方々へ心より感謝申し上げます。

Ⅰ　馬込は海にあらず

東京の文士村といえば、北の〈田端文士村〉、そして東の〈馬込文士村〉が浮かびます。田端が駅一帯のこぢんまりとした地域なのに対して、馬込は、馬込地区のみならず、中央、山王を含み、かなり広い範囲を指しています。今回随分長い時間歩いたようで、それでも全体の三分の一も歩いたかどうかと知って愕然としました。馬込の広さは、多様な土地の顔の謂（いい）でもあります。

出発地点はＪＲ大森駅、大森といえば、先ずは〈大森貝塚〉そして〈大森海岸〉でしょうか。芥川龍之介の「少年」には、初めて見た海である大森の「代赭色の海の渚に美しい貝を発見しよう」という一節があります。かの海は、中世ころまでは〈荒蘭ヶ崎〉と呼ばれる名勝だったそうで、駅前の天祖神社前には、「八景碑」が置かれています。大森八景坂からの眺望を「笠島夜雨、餃洲晴風、大森暮雪、羽田帰帆、六郷夕照、大井落雁、袖浦秋月、池上晩鐘」と記す八景勝覧の句は、炎天の下、涼やかな風を一時もたらしました。しかし、馬込は、海にあらず、その真骨頂は坂にあります。

天祖神社の左手に、山王の住宅地へ続く大きく曲がった階段があります。文士

の顔や、大正から昭和にかけての駅前の様子や風俗をモチーフとした立派なレリーフの数々が掛けられています。住民の方々が慣れ切った様子で素通りする横で、文士村散歩らしい始まりにちょっと興奮。この坂を上がると、かつて〈大森丘の会〉が開かれていた望翠楼ホテル、そして大森ホテルがあった筈です。〈大森丘の会〉のメンバーを、日夏耿之介は「われら大森グルッペ」と呼んでいたとか。小林古径、川端龍子、伊藤深水、片山広子、真野紀太郎、長谷川潔など、各芸術ジャンルが垣を隔てず交流していた貴重な時代を想起しました。

芥川龍之介は、もう一つ大森を舞台にした小説を書いています。「ある時雨の降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度も大森界隈の険しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪に囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒を下しました。もう鼠色のペンキの剥げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯の明りで見ると、印度人マティラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。」と始まる「魔術」です。インドの独立を考える善良なミスラ君から、欲を捨てられるなら魔術を教えてあげましょうと言われ、その気になった「私」は果たして……というこの童話を読んで以来、〈大森〉という場所は、何か神聖な異空間としてイメージされました。

『馬込文士村散策マップ』にも、外国人専用の「国際アパート」なる写真が掲載されていますが、多くの要人たちの居宅もあったのでしょう。一方、レリーフに彫られた文士たちは、麻雀、ダンス、相撲に興じてばかり？　「大森グルッペ」とも国際人たちともまた別の、その後に形成されたモダンな文士たちの生活ぶりに、馬込の個性をみたような気がします。

モース博士発見の〈大森貝塚〉は、大田区と品川区の境にありました。大森貝塚遺跡庭園は、「品川区立」と銘打たれ、大田区には、〈大森貝墟〉の碑が立ちます。それを横目に、いよいよ鵠沼とも縁の深い和辻哲郎の旧居址へ。何故か案内板と現地とが遠く離れていました。現在住んでいる方々のプライバシーを守るためか、案内板は公共の場になるべく設置するとのこと、充実した案内板があることを羨ましく思うのですが、ここにはここなりの問題があるようです。

文学散歩を通して思うのは、古き良き時代は、〈記憶〉と〈記録〉が頼りだということ。かつてあったＢＡＲ「ツーシスター」（榊山潤夫人経営）の址という現在のビルを見挙げつつ、そこに夜な夜な通った文士たちのざわめきを想像しました。

Ⅱ 坂の上のランドマーク

坂を上りまた曲がり、今回の文学散歩のランドマークともなる、「尾崎士郎記念館」に着きました。「馬込放送局」と言われた尾崎士郎は、昭和29年に初めての家をこの地にもち、10年住んだ後亡くなっています。この記念館は、書庫、客間、書斎を再現したものということですが、畳の良い香りのまだ残る清潔感のある建物です。

展示品のなかに一枚の色紙がありました。

「大悟一番死生の外に立てるや如何　士郎大兄　松太郎」

解説に〔尾崎士郎が癌で危ないらしいと耳にした時、文士仲間の川口松太郎は、尾崎ほどの人物が「生命の終わりを感ずることなく悶死するのはやり切れない気がして」(「瓢々録」) あえてその思いを色紙に託して送ってしまった。しかし、送った後、過酷な文書だったのではと気に病んでいた所、旧知の編集者が「尾崎先生は寝ながら床の間を指さし、川口が送ってくれたよと嬉しそうにおっしゃっていました。」と伝えてくれたので川口松太郎はホッとしたという。この色紙は、その後臨終まで枕頭の床の間に飾られていた。士郎は己の志を知る友の苦言を喜んで受け止めていたのである。〕とあります。本音がまた信頼を篤くする、まことに良い話だと思います。

中庭には、相撲好きの士郎がテッポウをした大きな欅が今もすっくと立っていました。その中庭に響いた、竹馬さんの篠笛「青葉茂れる桜井の」は、この上ない素敵な演出で、今も耳に、そして心に残っています。

北原白秋、山本周五郎、今井達夫、広津和郎ゆかりの場所を通過しながら、いよいよ文字通りの山場、臼田坂に入ります。尾崎士郎と宇野千代の住んだ赤い屋根の家がありました。二階の窓辺には美しい飾り皿が置かれていましたが、あれは果たして千代の遺品だったのでしょうか。かつては大根畑の唯中にあったと言われる其処は、今では静かな住宅地の一軒となっています。臼田坂周辺に住んでいたのは、士郎と千代のほか、衣巻省三、萩原朔太郎、川端康成、石坂洋次郎。ここで、頻繁に文士たちの往来があったことをまた想像せずにはいられません。

『馬込文士村ガイドブック』にもありますが、間宮茂輔作成の「馬込村民分類」は、大変面白くまた分かり易い分類ですので、ここにも敢えて引用させていただきました。

●酒飲まぬ麻雀、花ひきグループ：広津和郎、宇野千代、国木田虎雄、間宮茂輔
●酒飲み駄弁グループ：尾崎士郎、保高徳蔵、榊山潤、吉田甲子太郎、横山安夫
●酒飲みダンスグループ：萩原朔太郎、衣巻省三
●酒飲み孤高グループ：北原白秋、室生犀星
●酒もギャンブルもやらぬ超然組：川端康成

彼等のエネルギーがその後の作品の原動力となったことは、今さら言うまでもないことです。遊ぶこと、喋ること、飲むこと、何もしないこと、それらを意味あるものに変えるのは能力次第なのだと思い知らされたようです。

大田区立郷土博物館に到着したときは、歩いた満足見た満足でくたくたでした。草臥れるとはよく言ったものです、屋根と椅子の有難かったこと。入ったエントランスホールでは、稲垣足穂の特集が組まれていました。3階の常設展、〈馬込文士村〉コーナーは、馬込に住んだ作家たちの自筆原稿や画家たちの作品、遺品など、大変充実した展示ぶりです。北原白秋の家の、大きな上げ下げ窓が保存され展示されていたのが印象的です。緑のペンキで塗られたそれが、白秋の手によって開け閉めされていた時をまた想像します。

学芸員の岩崎さんから、馬込の文士村についての表と裏（！）の詳しいお話をうかがいました。

文士村とは何でしょうか。その定義を正確に下すことは難しいですが、田端が大正期に芥川龍之介を中心として形成された如く、馬込は昭和の作家、尾崎士郎あっての馬込といえそうです。作家たちの交流が何よりも面白い。そして、田端との決定的な違いは、女性の存在にあるのではないでしょうか。断髪と恋愛で馬込の女性たちをリードした宇野千代をはじめ、梔子（くちなし）夫人と呼ばれた教養高い片山広子の存在、そして赤毛のアンの村岡花子もいます。女性のパワー抜きにして、馬込を語ることはできない、そんな思いを抱きつつ、冷えたビールを飲み干しました。

海を望む坂の街、馬込に来て悟ったことは、一回だけでは馬込の何ものもわからず、さて第2回馬込散策はいつ決行されるのでしょうか。再会を期して筆を置きます。

（あんどう　まさみ）

馬込文士村散策

文士村レリーフ

道路に埋め込まれた日夏耿之介の案内

尾崎士郎記念館

「青葉茂れる桜井の」

案内板の数々

郷土博物館

（写真：有田裕一/竹内広弥）

馬込文士村とは

土岐 臣道（会員）

〔文士村の概要〕

私は馬込近くに住んでいますが、地元を散策していますと「文士村へはどう行けばいいのでしょうか？」と訊かれることがあります。が、「馬込文士村」という特定された地域があるわけではありません。ある時期に文士達（芸術家も含めて）が数多く住んでいた地域一帯を馬込文士村と呼んでいます。それは、現在の東京都大田区南馬込1～5丁目あたりと、山王1、2、4丁目辺りを指します。

ある時期とは、大正12年の関東大震災の後から敗戦前のおよそ20年間を言います。

尾崎士郎、宇野千代夫妻を中心に、のちに名を成す若き文士達や画家、彫刻家など、一年未満の短期居住者も含めると、半径1キロ以内に総勢100名を越す文人・芸術家が暮しました。ただ同一地域に住んでいたというだけではなく、文士達それぞれの深い交友がありました。なかでも文士村を賑わす話題の多い期間は、昭和2年～7年位の間で、文士村がまさに沸騰していたかの時代でした。

当時の馬込になぜこれだけの数の文士が集まって来たのでしょうか？ひとつには、尾崎士郎が、「馬込はいい所だ、引っ越してこないか」と逢うたびに誰それかまわず声をかけ誘ったこと。ふたつには、筆者の想像ですが当時の馬込の風景が文士達のイマジネーションを刺激し創作意欲をかきたてたのではないかと思われることです。以下に朔太郎の詩「坂」より抜粋してみます。

「坂のある風景は、ふしぎに浪漫的で、のすたるじやの感じをあたえるものだ。坂を見ていると、その風景の向ふに、別の遥かな地平があるように思われる。特に遠方から、透視的に見る場合がそうである。（中略）或る晩秋のしずかな日に、私は坂を登って行った。ずっと前から、私はその坂を知っていた。それはある新開地の郊外で、いちめんに広茫とした眺めの向こうを、遠く夢のように這っていた。いつか一度、私はその夢のような坂を登り、切崖の上にひらけている、未知の自然や風物を見ようとする詩的なAdventureに駆られていた。」

天才朔太郎の感性が切りとっていた馬込の風景です。坂のある風景が朔太郎の感性を大いに刺激しています。他の文士も然りと推測します。

〔文士達の交友〕

それでは、文士達の具体的な交流のいくつかを取り上げてみましょう。慶応の学生だった今井達夫が同人誌「椽（つばみ）」を抱え、学生仲間とはじめて新婚の尾崎家を訪ねます。黒髪を束ねた新進の女流作家宇野千代が、黒繻子の衿をつけた派手な色彩の半纏をはおり笑顔で出迎えます。士郎は文学を志す初対面の学生達をビールで歓待し、時間の経つのも忘れて文学論に興じ、学生達は終電車をやり過ごし、今井の下宿に泊まることになります。尾崎士郎の欠点は「人に愛され過ぎること」と千代は述懐しております。照れ屋でどもりがちな話しぶりは、聞く者の心を捕らえて離しません。士郎のこの魅力が文士村を形成する核でもありました。

やがて、萩原朔太郎や、衣巻省三の家で、文士達はダンスに興じ、あの室生犀星も時折ダンスの集まりに顔を出していたようです。一方、広津和郎の家ではマージャンの集まりがありました。覚えたての千代さんも国木田虎雄や間宮茂輔等と共にテーブルを度々囲みました。そんなある日、千代さんの断髪からモガ旋風が馬込に立ち昇り、川端康成の夫人秀子さんや、朔太郎夫人の稲子さんに広がっていき、馬込の空気は揺らぎます。萩原夫人の失踪事件や、士郎と千代の別居問題、榊山家の破局など、離婚問題に飛び火していきます。

「これはいかん」と川端康成は馬込から上野は桜木町へと引っ越していきました。昭和4年の9月のことでした。笑いに満ちた文士村にも、一時暗く冷たい風が吹き荒れました。

その後の交友の柱となるのは昭和 7 年の大森相撲協会の設立でしょう。尾崎士郎、山本周五郎、吉田甲子太郎、今井達夫、中村武羅夫、藤浦洸、鈴木彦次郎等々、土俵の上での裸の付き合いが始まります。四股名は尾崎が夕凪、今井は若鮎、山本周五朗は平錦でしたが、鼻息の荒さから馬錦と呼ばれました。体型のスリムな今井や藤浦は、どちらかというと消極的に参加していた様です。

尾崎士郎に『空想部落』という小説があります。当時のことを牛追村の出来事として物語にまとめ、昭和 14 年に映画化されました。全編ほぼ酒と議論の場面であふれ、当時の文士村の姿を今に伝えています。文士村に通奏低音のごとく流れていたのは酒であり、文学論を戦わす仲間との暮らしでした。

〔散策コースの整備と案内板の設置〕

――文士村の整備事業は「瓢箪から駒」だった？――

昭和58年度に策定された大田区の長期計画のひとつに、「みどりのネットワー

ク計画」がありました。既存の呑川緑道を主軸に、枝のように分岐する水路敷（六郷用水）の緑道化を促進し、公園や公共施設を緑で結び、ふれあい散策路を構築しようという環境・土木に関連するものでした。しかし、地域によっては道路幅員など物理的に不可能な地域が多く、緑化以外で町のイメージを高める策として、地元が既に持っている文化や歴史の魅力をネットワークしようと、テーマ別散策路の整備の提案がいくつか出されました。そのひとつに「馬込文士村コース」がありました。

昭和61年3月に「みどりのネットワークの整備（馬込文士村）連絡会議」は立ち上がります。その編成は従来の縦割り行政に囚われることのないものでした。

区の公園課、管理課、土木部、工事下水道課、企画部、都市環境部、社会教育部、久が原図書館長、郷土博物館学芸員がメンバーで、リーダーは公園課、事務局は土木部が担当しました。そして、文士に関する調査と拠点とルートに関する調査がそれぞれスタートします。

文士に関する調査は、当時郷土博物館の運営委員でかつ、文士村の文士に名を連ねる久保田正文先生に依頼しました。依頼者は「連絡会議」事務局の赤坂英夫氏で文士村整備の要となった人です。

昭和62年の盛夏、久保田先生の指導の下、大正大学国文科大学院生6名(小嶋知善・河田正彦・山内洋・木村隆・森山克人)各氏が、半月以上かけ作品コピー約600余ページの資料を作成しました。文士30名分の記録です。『史誌』32号に「馬込文士村の作家たち」として発表されています。

ここで同名の「馬込文士村の作家たち」が自費出版されていることに触れておきましょう。馬込文士村の調査・研究の源流を訪ねると野村裕氏（元馬込東中学校長）に辿りつきます。氏は昭和23年（29歳）から文士村の調査・研究を始められ、その成果を昭和59年「馬込文士村の作家たち」にまとめます。定年後も地元で文士の旧居探訪を目的としたサークルや文士村関連の教養講座の講師を務め、文士村の後継者やファンを育てられました。先生は文士村案内板の設置を区の担当部門に要請された最初の人でした。「馬込文士村の作家たち」発表の翌年突然の病に倒れられ他界。享年66歳でした。このご遺志は「牛追村歴史と文芸の会」（のちに「馬込村文芸の会」に改名される）の会員に引き継がれて行きます。

〔馬込文士村コースの整備〕懇談会

拠点とルートに関する基礎調査は、財団法人日本システム開発研究所に委託

され、文士の居住地跡、文化財、道路、公園などについて調査が進みました。昭和63年の春「馬込文士村コースの整備」懇談会が、区の主催で2度にわたり開催されました。学識経験者、「馬込文芸村の会」役員数名、自治会、商店会、地元文士村研究者が集まり、コースを設定し、案内板や解説板のデザイン（本とペンや原稿用紙のます目）など細部に亘って具体的な整備計画が策定されました。

〔案内板の設置〕

昭和63年度総合案内板4箇所と文士住居跡解説板32箇所が設置されました。

総合案内板・・・4基

JR 大森駅西口広場、大田区立蘇峰公園、太田区立郷土博物館、都営地下鉄西馬込駅前

住居跡解説板・・・30人　32基　（尾崎士郎、室生犀星はそれぞれ2基設置）

多くは周辺に住む人のプライバシーを尊重し、近隣の公園や公共施設に設置されています。その他、散策道の誘導標識や駅前の文士村レリーフは、翌平成元年に整備されました。

〔記念館の設立〕

山王草堂記念館および、蘇峰公園

徳富蘇峰の記念館と公園は、昭和62年6月着工、12月に竣工し、翌63年4月にオープンしています。記念館の総工費9千万円、蘇峰公園は約1億円、土地の取得費が約15億円。「みどりのネットワーク計画」で整備されました。

熊谷恒子記念館

平成元年3月、作品すべて（100点余）と書道関係の書籍を土地建物付で区に寄贈されました。区は建物と庭園を整備し恒子氏の作品を保存・展示する施設として平成3年11月に開設、現在に到ります。氏は皇后陛下の書道の師でもありました。

川端龍子記念館及び龍子公園

記念館は龍子画伯自身の設計で、昭和37年に建てられた美術館で俯瞰するとタツノオトシゴの形になっていると言われております。作品すべてと記念館の建物220坪、土地600坪、隣接する自宅及びアトリエとその敷地777坪、すべてを平成元年区へ寄贈されました。自宅とアトリエは龍子公園となっています。昭和37年築の記念館は現在耐震工事中で12月に再オープンの予定です。

赤毛のアン記念館・村岡花子文庫

個人宅の一部を開放して展示。長女のみどり氏が平成3年に開館。4年後に建て替えられ、現在は孫の美枝氏と恵理氏によって運営されています。要予約の記念館です。

尾崎士郎記念館

区民の声が届き開館に漕ぎつけました。平成22年開館の一番新しい記念館、「文士村継承会」を中心に観光協会や「文士村ガイドの会」が協力し500名の署名を集めて嘆願し成就しました。改修および整備費は4,888万円でした。

残らなかった記念館

小林古径、北原白秋、などの住んだ家は住民運動をするも機は熟せず、幻の記念館となりました。古径のアトリエは故郷の新潟県上越市高田城址公園に移築され、白秋の住んだ家は1階の窓枠のみが残され、郷土博物館に展示されています。

〔博物館の展示〕

郷土博物館

昭和54年開館の人文系博物館。区の人文科学系資料を中心に調査、収集、整理、保存し、研究成果を「紀要」や「ガイドブック」などの刊行物として出版、常設展や企画展を通じて郷土の文化や歴史を分かりやすく解説・展示、地域住民や児童の学習の場としても活用されています。3階の文士村フロアーでは文士たちの作品や自筆原稿、ゆかりの品を展示。尾崎士郎、宇野千代、室生犀星、吉田甲子太郎や女流の吉屋信子、村岡花子さらに川端龍子や真野紀太郎、川瀬巴水、伊東深水などの画家も含めて、その仕事と生活を紹介しています。会場には馬込文士村のジオラマや文士を解説するビデオコーナーもあります。

山王会館馬込文士村資料展示室

平成7年オープン。主に山王地域の文士の作品や直筆原稿及びゆかりの品を展示しています。

馬込図書館

2階に「馬込文士村資料室」がある図書館。近くに住んだ文士、城左門（昌幸）の自筆原稿や蔵書が寄贈され、郷土博物館に次ぐ文士村資料の豊富な図書館です。

（とき　しんどう）

鵠沼と馬込〈双方に関わりのある文士など〉

鵠沼を語る会 編

鵠沼と馬込の双方に住んだ文士（アイウエオ順）

今井　達夫（作家、1904~1978）

横浜に生まれ、小学3年より鵠沼で育ち、震災後20年間馬込に住んだが、その後鵠沼に戻り、死ぬまで鵠沼で過ごした。

北川　千代（作家、1894~1965）

大正5年、江口渙と結婚。同10年、鵠沼中屋旅館の貸家に二人で住むが、翌11年に離婚。足尾銅山の労働運動家と同棲。昭和6~11年馬込に住む。

北村　初雄（詩人、1897~1922）

中学卒業時、東京高商卒業時に詩集「吾歳と春」「正午の果実」を出す早熟。三井物産に勤務するも病を得、大正11年、馬込に住み、さらに鵠沼にて療養に努めるも夭折する。

国木田　虎雄（詩人、1902~1970）

独歩の息子。関東大震災前から鵠沼に住む。当時から今井達夫と親交があった。1923年、馬込に移住。1925年から又、岸田劉生の住んだ鵠沼松本別荘に住む。

子母沢　寛（大衆作家、1892~1968）

大正12年、妻と上京、馬込子母沢に住む。ペンネームはこの地名から取った。昭和3年から毎夏、鵠沼に避暑に来たが同20年から鵠沼に永住した。

日夏　耿之介（詩人、評論家、英文学者、1890~1971）

明治から大正にかけての頃からの馬込の住人、昭和7年10月から翌年12月まで鵠沼で神経性心悸亢進症の療養をした。

日吉　早苗（作家、翻訳家 1900~1953）

今井達夫の馬込時代からの友人、鵠沼中学の教師の口を今井が世話した。同校校歌の作詞者。馬込では山本周五郎とも付き合いがあった。

広津　和郎（作家、評論家 1891~1968）

柳浪の次男。馬込では父の家と目と鼻の先に尾崎士郎の世話で松沢はまとの新居を持つ。

鵠沼の岸田劉生宅を訪れたこともある。

広津　桃子（作家、1918~1988）

広津和郎の一人娘として馬込で生まれる。昭和27年、鵠沼桜が岡に母と住み、亡くなるまで、そこで過ごした。

広津　柳浪（作家、1861~1928）

大正5年息子の和郎と片瀬に住む。関東大震災の後、馬込に居を移した。

真船　豊（劇作家、1902~1977）

昭和6年から馬込に住み、同13年病気の妻の転地療養のため鵠沼に転居したが、ここで妻を亡くし、鵠沼滞在は2年程であった。

室伏　高信（作家、評論家 1892~1970）

「室伏が何時ごろ鵠沼にいたかはっきりしない。が住いは鵠沼石上であった」と今井達夫は書いている。馬込の家は厳島神社弁天池の近くであった。

和辻　哲郎（哲学者、1889~1960）

卒論を書くため学友高瀬弥一の鵠沼の邸宅に起居し、妹照を見染め明治44年に結婚し馬込に新居を構える。大正4年から7年まで高瀬邸の離れに住む。大正6年、岸田劉生が鵠沼に移った時、机と椅子と石油ストーブを贈っている。

鵠沼に逗留したことのある馬込文士（アイウエオ順）

〔東屋旅館〕

今井　達夫（作家、11904~1978）

幼少時は毎夏、東屋に避暑に来ていた。

北原　白秋（詩人、1885~1942）

大正9年12月、与謝野鉄幹晶子夫妻、西村伊作らとともに東屋を訪れる。昭和2年馬込緑が丘に建つ赤い屋根の西洋館を借り、昭和3年世田谷若林に移るまで住んでいた。

広津　和郎（作家、評論家 1891~1968）

宿泊の記録はないが、震災前、宇野浩二らと投宿中の文士を訪ねて頻繁に出入りした。

広津　柳浪（作家、1861~1928）

明治時代、硯友社の仲間と鵠沼東屋に逗留。

吉屋　信子（作家、1896~1973）

大正10年に逗留した。

〔中屋旅館〕

吉屋　信子（作家、1896~1973）

大正 9 年、中屋に投宿「海の極みまで」を執筆。当時、島田清次郎も宿泊していた。

大正 13 年、馬込に母と家を持ち、同 15 年下落合に移るまでを過ごす。

〔海水プールの小屋〕

尾崎　士郎（作家、1898~1964）

昭和 3,4 年ころ、今井達夫が東屋の女将を紹介。その縁で海水プールに泊ったという。

尾崎は大正 12 年、前年知り合った宇野千代と馬込に居を構える。昭和 4 年宇野千代と別居、古賀清子と品川東禅寺裏を転々とする。昭和 7 年大森源蔵が原、13 年大井出石町、29 年山王にはじめて自邸を持ち、39 年同所で死去。尾崎士郎記念館はこの最後の家の書斎、書庫、客間を再現したもの。

〔岸田劉生宅〕

川端　茅舎（俳人、1897~1941）

日本画家川端龍子の弟、はじめ洋画家を志し、岸田劉生に師事する。再三鵠沼の劉生宅を訪れ、泊っている。（劉生日記には、本名の信一で書かれている）

馬込には兄龍子の家から 1km ほどの池上本門寺の門前に住んだ。

鵠沼に遊んだ馬込文士（アイウエオ順）

倉田　百三（作家、劇作家、1891~1943）

大正 9 年、明石から大森新井宿に来てから、ここを本拠に馬込、出石、藤沢、牛込と短期間ずつ、また療養のため鎌倉にも住んだ。岸田劉生との付き合いもあり、劉生が大森を訪ねたりしている。

小島　政二郎（作家、1894~1996）

大正 6 年、片瀬に避暑に来る。馬込時代は昭和 12~19 年、以後鎌倉に住んだ。

すわん会関係の馬込文士（アイウエオ順）

添田さつき（作家、作詞家、1902~1980）

本名は知道。演歌師唖禅坊の子息。自身も演歌師で売り出したがレコードの普及で小説家に転向。今井達夫と寺崎浩が設立した「すわん会」に馬込から参加。

藤浦　洸（詩人、作詞家、1898~1979）

馬込では夕方になると「のもう」ということになり、尾崎士郎、吉田甲子太郎、榊山潤、山本周五郎、今井達夫らが集まった。と藤浦は回想している。今井が作った会で、盟友渡辺紳一郎がボスとなれば、藤沢遠しといえども「すわん会」にはせ参じた。

その他、鵠沼とかかわりのある馬込文士など

片山　広子（歌人、翻訳家 1878~1957）

外交官の家に生まれ、上流家庭に育つ。ペンネーム松村みね子。明治 32 年、のちに日銀理事になる片山貞次郎と結婚。明治 43 年大森馬込に住む。晩年を鵠沼で過ごした長谷川巳之吉（第一書房）が書房設立時、彼に資金援助をした。

山本　鼎（画家、版画家　1882~1946）

小学生の自由画教育運動で、鵠沼在住の岸田劉生とともに、活動する。
馬込に住んだのは北原白秋の妹と結婚してからのようだ。

吉村　鉄太郎（文芸評論家、1900~1945）

本名、片山達吉。片山広子の子息。長谷川巳之吉は第一書房設立時の恩義を忘れず昭和 16 年に吉村鉄太郎を後継者に指名している。

参考文献

馬込文士村ガイドブック　　鵠沼ゆかりの文化人
藤沢文学年表　　藤沢の文学
岸田劉生全集　　鵠沼物語 I ～IV
鵠沼物語草稿？　　馬込文学村二十年

くげぬま断章（Ⅳ）

村上春樹の雑文にふれながらの、ある一日の通信

山上 英男（会員）

・・・僕は昔、１年ばかり藤沢の鵠沼に住んでいたことがある。
１９８６年だったかな。ずいぶん昔です。そのころはまだ家のまわりを人力車が走っていた、というのは真っ赤な嘘だけど、とにかくここに住んでいるときに『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』という長い小説を書いた。（中略）
小説執筆のかたわら（というと、なんか文士っぽいですけど）ときどき散歩の足を伸ばして、ここ〈ホノルル食堂〉まで昼ご飯を食べに来ていました。値段が安くて、気軽で、魚が新鮮でおいしいので、サーファーたちが好んでここで食事をしていた。

（村上春樹『地球のはぐれ方』より）

◆ ホノルル食堂

先週、年若い友人が３人つれだって遊びに来た。
前日は激しい雨だったが、この日はからりと晴れて涼しい風が吹いた。

昼の食事は、江ノ島でするつもりでいたが、たまたま話題が村上春樹に及んで、「〈ホノルル食堂〉なるものを覗いてみたい」という奇特な希望が出た。
私たちもまだ一度も入ったことはない。
「その店の前をよく通るけど、ただの食堂だよ」と強調したが、「湘南イコールおしゃれというようなラインとはぜんぜん無縁な〈浜辺の食堂〉で〈なにしろ店の名前がごきげん〉」という春樹の言葉をみな面白がって、行ってみることにした。

営業はお昼だけで、定食に魚料理をだす地元の店である。
アルミサッシの入り口を入ると、カウンターとテーブルあわせて17席ほどか、家族連れやサーフショップの日焼けした男女、中年のオバサンたちが席を占めていて、少し待たされた。
福相の主人と素っ気ないけどテキパキしたおかみさんが切り回していた。

ボードに書かれた魚料理を注文すると「それは今おわった」といってボードからそれが消される。その日、それだけの魚料理、というのがいい。

春樹にすすめられたからではないが、やはり「昼間のビール」にした。それがほどよく効いて、まさに「メロウな気分」になってとりとめがない。

それでもこの鵠沼で書かれたという『世界の終わりと・・・』を話題にしたりもして、「あれは安部公房の『壁』に似ている」とか「イヤ似てない」などと、けっこう生真面目な文学青年を、皆さんやっていた。

久しぶりの談論風発の飲食のあと、海岸へ出た。

◆ ホームレス

前日の雨に洗われて、ハマヒルガオの丸い葉は艶やかだった。これらの海浜植物が根を張る砂浜の小高いところに腰をおろし、歓談をつづけた。

いつも見かけるホームレスの老人が背中に青いシートをかけて、私たちの前の砂防垣に沿って、片瀬のほうへすたすた歩いていった。

それを見送りながら、S君が「風格があるなァ」ともらした。確かに褐色の肌をした痩身の老人（？）は、実に思慮深い顔立ちをしているのだ。

「私たちは〈インドの哲学者〉ってひそかに呼んでるのよ」と家内が言った。

それで、ふと思い出して「村上春樹がね、ずっと昔、この海岸で筑紫哲也そっくりのホームレスを見たということを書いていてね・・・」と話した。

・・・春樹が週刊誌の記者に、そのことを伝えたら、翌週の雑誌グラビアに〈こらあ、テツヤ！〉というタイトルで、そのホームレスのおじさんがばっちりアップで出ていたそうだ。

そこでの彼の反省の弁が面白いんだ。

・・・せっかく自由気ままにやっていたのに、僕のおせっかいで〈あ、うちのお父さんがこんな所に！〉なんてことになったのじゃないか、記者にはうかつなことをしゃべっちゃいけない、反省しよう。と思ったんだが、でも今度、もし久米宏にそっくりなホームレスを見たら、やはりまた〈ねえねえ、知ってますか〉と電話をかけちゃいそうな気がする、というエッセイでね・・・

そんなことを紹介した。

みな大笑いしながら、ひとしきりホームレスについて、それぞれのエピソードを披露しあった。

「ずっと前、飲みすぎて帰れなくなったとき中野駅の構内で、友だちと新聞紙を敷いて寝たけど寒くてダメで、困っていたらホームレスのおじさんが、ダンボールを貸してくれたことがあって助かったけど、・・・でも、おじさんのあの異様なニオイには参ったなぁ」というU君の話にも、腹の皮がよじれた。

◆ 猫

ここは犬を連れた人の散歩が多い。ずいぶん小型犬が増えた。猫より小さい犬とすれ違うときには、うっかり踏みつぶしはしないか心配になる。

リードをはずされた大型犬が飼い主の前後を嬉しそうに走る、あの波打ち際の散歩風景はあまり見なくなった。鵠沼海岸風景のちょっとした変化だ。

「また村上春樹だけど、彼が飼っていた猫は、散歩についてきたというね」「ほんとですか。人と一緒に散歩するネコ、ですか・・・」Ｉ君が驚く。「俺は、リードをつけて散歩してる猫、見たことあるよ」とU君。「作家の、その猫はリードなしで、ちょこちょこ後をついてきたそうだよ」みな、「へー」という顔をした。

・・・国立（くにたち）の一橋大学のグラウンドに連れて行って４００ｍトラックを一緒に走ったことがあるそうでね。いちど２００ｍほど後をついて走ったけど、それ以上は無理で、そこに立ち止まって、腹いせにウンコをしたと書いてあったね。「プライドの高い猫で、それを傷つけられると嫌がらせに脱糞するクセがあった」と言っている・・・

これにも、みんな笑った。

「やっぱりこの話でも、結びの所が面白いんだ。〈一橋大学のトラックの真ん中に、二十年前にぽつんと落ちていた猫のウンコは、だからうちの猫のものです。すみません〉とあってね・・・」と話した。

「なんだか、長新太の絵の世界を連想させて、ソコハカとなくおかしいですね」と、Ｓ君が笑いながらこたえた。

「この脱糞事件が１９７０年代初めの頃とすれば、国立で４０年あまりを過ごした私たちには、とりわけ面白くてね・・・」と私はつづけた。

以前、この話を読んだとき、３人の子供を連れて大学の構内で遊んだその頃の

光景が私の頭の中をよぎったものだった。兼松講堂前の池でラジコンの潜水艦がブクブク潜ったまま再浮上しなくて長男を落胆させた光景も浮かんだ。

そして、４００ｍトラックで駆けっこしたり凧をあげたり、キャッチボールをした四季折々が回想された。

一橋大学構内でのそんな思い出を、みんなに話してから、「この記憶に、このエッセイを重ねるとね・・・村上春樹の猫のウンコをうちの子たちが踏んづけて〈こんなところに、ウンチさせちゃあイケナインダヨネ。オトウサン〉と５歳のむすめが大騒ぎしたかもしれない、という空想が成り立つわけで・・・

まあ、どうということはないんだけど、私には二倍楽しめたエッセイだったね」なんていう話もした。

そのころ、わが家でもＭと名づけたトラ猫を飼っていたが、Ｍがわれわれと一緒に外出するなんてことは、むろん一度だってなかった。

◆ ジャズ喫茶

マリンロードの〈香房〉はジャズが流れる喫茶店だ。レコードで聴かせるほど凝ってはいないが、いい曲を流し、自家焙煎のコーヒーを飲ませる。

長いことご無沙汰している店なので、帰り道、久しぶりに寄ってみようかと思ったが、私たちの前を一陣の風が吹き過ぎたとき、なんだか皆さん里心がついてしまって、このまま戻りましょうということになった。

缶ビールを買って帰り、「この季節には、サムシン・エルスに収められているマイルズの〈枯葉〉とか、マル・ウォルドロンの〈レフト・アローン〉のような曲がいい」と言って、それをＣＤで流しながら、また飲んだ。

やがて盆のような大きな金色の月がのぼるのをみて、３人は帰っていった。ここでも春樹つながりで、彼が経営した国分寺のジャズの店〈ピーターキャット〉のことも話題になったが話がくどくなるので、これはもうふれない。

こんな日もあったという、ただこれだけの鵠沼通信です。

（やまかみ　ひでお）

「鵠沼物語」草稿？について

岡田 哲明（会員）

ここに紹介する原稿には表題がない。が書かれているのは、今井の記憶にある「鵠沼に何らかの関わりがあった作家、画家ら文化人の人物メモ」といった内容である。

思いつくままに列記していったもののようで、完結しているとも思われない。福本和夫の項につづく人物がまだありそうである。

昭和45年8月30日の朝日新聞に連載された「湘南異聞」というシリーズの第6回に、『作家今井達夫さんは、いま鵠沼にいた文人を中心にした「鵠沼物語」を執筆中』という記事がある。

本稿の「私と鵠沼との結びつきは、…」ではじまる巻頭の一文の終わりに「大正12年の震災で家が全壊するまでの12年間、私の十代は鵠沼で過ごしたのである。そして昭和10年末から翌11年春までと、昭和17年12月から、あいだ1年ほど置いて、今日45年までの28年を過ごしているのである。」とあるのでこの文章が書き始められたのは昭和45年であり、それも夏前と推定され、新聞記事と一致するから、これは「鵠沼物語」の草稿であろうと思われるのである。

「鵠沼物語：湘南の作家たち」（「鵠沼別冊」平成16年3月8日鵠沼を語る会刊に復刻）が発表されたのは、今井の没後5年を経過した昭和58年1月に創刊された「三田理財クラブ一二五」という雑誌（三田書房：隔月発行）の第2、3、4、6号の4回にわたって連載されたが、この雑誌は同年11月第6号を最後に休刊となった。したがって「鵠沼物語」は連載中断となったらしい。この雑誌発行の協賛者に今井の義弟、平松幹夫（慶応大学教授）の名があるから、彼が遺族から原稿を預かり掲載したと推測されるが原稿が残っていないので、未掲載分がどれだけあったかは全く不明である。

なお、今井の未発表原稿の一つである「馬込文学村二十年」に「もうひとつのあとがき」があり、『この「もうひとつのあとがき」を書く前に「鵠沼物語」とも称したい、鵠沼に題材をとるこれも回想録を綴るべくメモを取りつつある私であった。』とあり、その日付けは昭和45年11月24日であることを、「馬込文学村二十年」の活字化を担当した土岐会員から教示を受けた。　（おかだてつあき）

今井達夫遺稿

「鵠沼物語」草稿？

今井 達夫

私と鵠沼との結びつきは、大正元年秋、父の療養の目的で横浜から移って来、鵠沼小学校の三年に編入したことによるが、それ以前にも1年だけ伊豆伊東で夏を過ごしたほかは、毎夏この土地に来ていた。水兵服に横浜老松小学校の徽章を付けた帽子をかぶっている小学校二年生の私の写真も残っているし、現在はドライヴウエイになっているあたりにあった東屋の持ち家に住んで、高潮に襲われ東屋から舟で助けに来てくれた情景も目に残っているし、東屋の庭の池に面した貸家で過ごした夏、泥棒に入られたのも覚えている。伊東で過ごしたのが1年生だったことは年長の従姉が証言するから、そして3年生の夏のことは住んだ家についても御大葬に向かう列車を遥拝するため遠い東海道線の線路ぎわまで行った記憶がはっきり残っているから、早生まれの私の7歳以前の鵠沼については2年間の夏、それから東屋と無関係な山田という父の知人の別荘をひと夏借りたことを数えると、数え年の四、五、六歳の夏をこの三つの記憶に結び付ければいいのである。

もっとも、どれをどの夏に当てはめるべきかについては、いささか自信を欠くが。それ以来、大正十二年の震災で家が全壊するまでの十二年間、私の十代は鵠沼で過ごしたのである。そして昭和十年末から翌十一年春までと、昭和十七年十二月から、あいだ一年ほど置いて、今日四十五年までの二十八年を過ごしているのである。ある人が戯れにいった。「もはや、古老だね。」その通りである。

里見 弴

熱海へバアナアド・リイチに逢いに行くとき車中で伊東の尾崎士郎に逢いに行く私は、彼の姿を見つけて「潮風」の現実の年月を訊いた。彼、即座に反射的に答えた。「明治四十二年。」その年の夏、私も東屋の離れか貸別荘にいたはずである。「潮風」は里見弴の傑れた青春小説で、志賀直哉のごとき大学生と二人で東屋に滞在していた。

志賀 直哉

田岡（編集注：典夫）に訊いてもらう。

尾崎 士郎

長谷川路可の母親（東屋の支配人）に紹介。引地川の東側にあった海水プールという小屋に宿泊したところ、風が吹くと砂が葭簀を通って入って来たという。昭和三、四年「都」に「放浪街」を書いた頃である。その頃、**木蘇穀**が本村の番場の貸家にいた。木蘇はそれより前、芥川龍之介が住んでいた頃からの住人であった。（編集注：木蘇穀＝明治の漢詩作家、木蘇岐山〔本名、牧〕（1857/4/27~1916/7/30）の息子？）

芥川 龍之介

大正十年頃、**沢木四方吉**の療養のための借家探しをしたいという小島政二郎の求めで、長谷川路可の母親に紹介の名刺を書き、東屋の離れの二階家を借りたが、沢木が鎌倉に加藤謙蔵の設計で家を建てて越した後に芥川が住んだのである。大正15年のことである。**加藤謙蔵**は三田の文科で石坂洋次郎と同級「イヤリング」の翻訳などあるが、のち建築設計に興味を持ち、鵠沼における自宅も自分の設計によるものである。夫人は与謝野晶子の女。

吉屋 信子

中屋旅館の三階にいたのは大正十年で、同じ年の宿泊者として**島田清次郎**が門を入ってすぐの離れにいた。**国木田虎雄**と二人である晩訪問したところ、のちに時事新報文芸欄に載った「早春随筆」の原稿を読まされた。そのころまだ鵠沼引地川畔に住んでいた**中村武羅夫**に吉屋に紹介しろとせがんで断られたと聞いて、同じ小説家同士なのに同じ宿屋にいながらヤボったいぜと国木田と私は笑った。国木田は十九歳、私は十七歳であった。

久米 正雄

東屋の長い滞在客で、新聞小説の執筆をしたほどである。はじめて逢ったのは海岸に近い堀割で毎日釣りをしていた中村武羅夫を国木田とふたりで訪ねたところ、そこにいたのであった。久米は島田のはなれを玉座と呼んだりして島田の思い上がりやヤボったさを冷やかした。その心持の影響が私たちにあって島田を軽

んじたのだが、島田の精神状態にもおかしなところが見えはじめていたのである。

大正 10 年早春、海岸の砂浜で枯れ草に火をつけたところ燃え広がったのを、久米が脱いだ羽織で叩き伏せて消し止めたことがあった。彼は毎日書きあげるとその新聞小説の原稿を帳場へ持って下り、お上に読んで聞かせた。お上とは路可の母親である。武羅夫の釣り場、彼は投網を打つ連中に憤慨して堀割の中に棒杭を打ち込んだりした。その釣り場ではじめて久米に逢ったのだが、その時通りかかった蜜柑売りの若い娘をからかったことから買わなければならない羽目になり、ガマロを持っていたのは私だけだったので二十銭か三十銭立て替えた。久米いわく「きっと返すよ、すぐ返すよ。」

年月がたち昭和二十年七月末久米、中山義秀と三人で鉄道省関係の講演旅行で福島県下をまわったとき、久米と安積中学で同級だった人に招待されて磐越東線のある駅で降りることになった。駅から大分距離のあるその家まで自動車があるかないかの賭けになり、義秀と私が勝った。

「君たち二人で五十円づつ、僕が負ければ百円出すよ。」

木炭自動車は駅前で待っていた。彼は言った。

「負けたよ、五十円づつ借りておく。きっと返すよ。」

「久米さん、僕の方は五十円三十銭。」

怪訝な顔をする彼に二十五年前の鵠沼での話をした。

「思い出した。今井君には五十円三十銭、きっと返すよ。」

車中、僕をつくづく見て

「君はあのころ痩せていたね、鶴みたいな脚の持ち主だった。」

はっきりとその頃のことを思い出したのである。私は十一貫ない体だったのだ。しかし、戦後、幾度か逢っているのに、とうとう返してもらわなかった、懐かしい思い出である。思い出を二三。

関東大震災後、銀座のバラック建てのプランタンで久米、久保田（万太郎）、吉井勇の三人連れを見かけ、久米の結婚を知っていた私は、手帳を破いて祝意を表す短文を書いて女給に届けさせた。生意気な学生だったが、彼はそれを見て笑顔を向けて来た。福島県下を回っているとき白河の旅館で空襲警報のため帳場へラジオを聞くべく下りて行ったとき、若い女中に手を引かれて長い廊下を歩いたといったら、どうしてキスをしてやらなかったんだ、それが礼儀というものだよと、教えてくれたことがあった。戦後、文壇野球チームの総監督に彼がなって、女子プロチームと対戦して私がヒットを打ち一塁へ走った時

「おそいなあ。」
と憮然たる表情をしたのが目に残っている。
（編集注：大正 10 年早春…の書き出しから 33 行は江口渙と武者小路実篤の項の間に書かれていたが、明らかに久米正雄に関する記述なのでここに移した。）

江口 渙　北川 千代

この夫婦は島田の居た離れと向かい合う道を隔てた一軒家で、久米と一緒に訪ねたのだが、7,8 年前あるパアティで訊いたところ「あれは大正十年三月から十二月まで」という返事が即座に返って来た。素晴らしい記憶力の持ち主は里見だけではない。

菊池寛　芥川龍之介　久米正雄　佐々木茂索　大橋房子　宇野浩二
東屋関係　葉山三千子　大杉栄（大正 10 年・久米のスナップ）　**武林無想庵**
中平文子

武者小路 実篤

大正四年「その妹」を書いたころ、その近所に家のあった私は海へ行くには彼の家の前を通って標札を見て妙な姓があるものだと印象に残った。小学校五年だった私であった。その後、文学少年になり白樺を読みはじめ彼の名前を知り愛読者になると、はたしてその家が彼の住居だったのかと思い迷ったりした。一日中三味線を弾いている家のとなりで、広い小松林のなかの小さな平家であったが、私の疑いを晴らしてくれたのは里見弴である。
「岸田の家との地理的にはどうなっているの？」
私が説明すると、それなら君の言うとおりだと証明してくれた。私はそのことを随筆に書いたが、そのために後日譚が生まれた。河出書房の文学アルバムの担当者が突然訪ねて来て案内しろというのである。もちろん承諾し文学アルバムにその家の前の路の写真が載っている。彼は鵠沼とはいろいろ縁故があるようだ。
「おめでたき人」のなかに鵠沼のメン・ロードを歩くところがある。
「やあい、お天気だのに足駄をはいて、女を連れて歩いてらあ。」
これは彼を見かけた村の悪童の野次であるが、その時、主人公が泊りに行ったのは東屋でも中屋でもなく、早く無くなった鵠沼館（こうしょうかん）という宿屋である。
あとで知ったことだが、戦後十年ほどのち、画家という触れ込みでひと夏きて

いたという。真偽は問い合わせれが分かることだが、わざわざ煩わせることもあるまい。(編集注：最後の 3 行は金子保のあとに、武者小路の項がふたたび書かれていたのをここにまとめた。)

岸田 劉生

彼が鵠沼に住むようになったのは肺結核という誤診のためであった。そのおかげで鵠沼に題材をとったいくつかの名作が生まれたわけだが、鵠沼を選んで転地したのは白樺の人たちに親しかったからであろう。彼は関東大震災で借りていた家がつぶれなければもっと長く住んでいたに違いない。その家は元通りに建て直され、やはり鵠沼で震災に合い関西に逃げたのちまた戻って来た国木田虎雄が住んだが、大正 15 年、沢木のあとに住んだ芥川龍之介が、東京へ出るといった国木田の後に住む心持を動かして見にきたけれど実現しなかった。もし実現していれば翌年の自殺はどうなったであろうかと私たちは今になってもしばしば友人と話すのである。**芥川比呂志兄弟**は母親と一緒に鵠沼に疎開してきて、**葛巻義敏**と同居していた時期があった。

椿 貞雄

八軒別荘という松林のなかに点在する貸家があって、その一軒に住んでいた。岸田は毎日訪問したりされたりしていたが、そのたび私の家の前の道を通ったものである。彼の晩年に一度だけ逢ったが、それは大調和展の会場で河野通明の紹介による。そのとき麗子にも逢ったので、一年ほどのち東急が藤沢からぶっ通しに作る広い道路のため旧岸田邸が取り壊しになるとの話を伝え、その前に一度見に来ないかと誘った。見に来た麗子夫婦、河野を連れて行ったところ「昔より立派になった。」と麗子はいったが、それは道から出入り自由だった庭が生垣で立派に仕切られていたからだったろう。その麗子も故人になったし、一時取り壊し中止になったその家もなくなってしまった。

(編集注：河野通明は通勢の子息、岸田麗子、二人とも大調和会員)

横堀 角次郎

劉生の門下で現在も春陽会に所属しているが、劉生が住んでいた頃は鵠沼中屋に下宿していた。海で一緒になると、おどけたおしゃべりをして笑わせたものだ。劉生絵日記にたびたび登場する。鳥海と仲間だった関係で私もずっと交友が続い

ているが、私の妹たちは海でからかわれたりしたので怖い人との印象を持ったらしい。

硲 伊之助

「鵠沼の白い橋」という8号か6号の名作は今でも目に残っているが、それは多分東屋へ大杉を訪ねて来て描いたものだろうと想像する。とすれば、それは大正十年作である。その白い橋（ペンキ塗りの小さな橋）は中村武羅夫の釣り場のすぐ近いところにあったが、その堀割も埋め立てられた今日では記憶にしか残っていない。

（編集注：「鵠沼の白い橋」は第5回二科展（大正5年）出品作、この橋の先に硲の別荘があったのを今井は知らなかったらしい。硲が大杉を訪ねたと今井が想像したのは、大杉と親しかった林倭衛が硲と親友であるのを知っていたのであろう。林は1919（大正8）年8月17日「出獄の日の大杉栄」を描いて同年秋の二科展に出品し、警察から展示を禁止された。大杉の東屋逗留は大正10年9月からである。）

金子 保

藤沢中学で私たちを教えた時期は美校を出たばかりの若手で、文展帝展の常連であった。のちにわかったことだが、麻布中学で芥川や広津和郎と同級乃至同窓であった。大正十五年夏、稲村ヶ崎へ避暑していた私が鵠沼に遊びに行き、のちに尾崎が使った「海水プール」（夏は営業していた）で芥川に紹介してくれたひとである。現在は片瀬の片山哲の隣にアトリエを構えて健在である。

（編集注：芥川は府立三中で麻布中ではない。昭和56年没、享年90）

徳冨 蘆花

「思い出の記」の中に出て来る鵠沼が小説にあらわれた最初ではなかろうか。引地川のほとりの砂原で淡いラヴシーンがあった。月見草。彼が宿泊したのは太平館という宿屋で、年代は明治中期か。長谷川欽一氏にもう一度聞くこと。×

ベルツの日記（浜辺正彦訳）：明治九年来日、三十八年帰独。二十六年間大学で医学教育

六月十日開講。

（「思い出の記」は）明治三十三年～四年国民新聞連載。

伊香保で聞いた命名の話「不如帰」

（編集注：この行は寺崎と邦枝の間に記述されていた。なお、「不如帰」の国民新聞連載は明治 31~32 年）

内藤 千代

漢学者だった父親から個人教授を受け、小学校には行かなかった。明治時代末年、博文館発行の「女学世界」に随筆を毎号のごとく書いた流行作家であった。博文館大橋新太郎と取り交わした出版契約書には印税一割二分と明記してある。

買い切り時代とすれば大変な優遇であった。大正に入ると筆を断ってしまったが、私の家へ彼女の妹が、彼女の幼い娘を抱いてたびたび遊びに来たのを覚えている。博文館との契約書を見せてくれたのは、そのときの娘さんが成長した人である。鵠沼海岸地区の中央海寄りに千代の家は、大きな松に囲まれて建っていた。

藁葺きか茅葺きか草葺きの小じんまりとした家で屋敷は広く、玄関前にあじさいの花が咲いていたのが印象的であった。父の個人教育を受けたころは、汐止め通りの大きな農家のはなれだったらしい。切れ長の目で日本髪を結っていた顔が目に残っている。

中村 武羅夫

鵠沼へ来たのは結核の療養が目的だったとのことだが、堀割の釣りと庭に作った土俵の相撲とで克服したらしい。

辻堂に広い松林を買い家を建てたのは震災前年で、この費用は婦女界社長都河龍から借りた五千円を充てたと当人の口から聞いた。それは婦女界社三十周年祝賀会（帝国ホテル）の席上で、同じテーブルに竹田敏彦がいたのを覚えている。（昭和十八年か。）新潮社でなく婦女界社から借金をした理由は彼が同誌の連載小説小栗風葉の代作を引き受けていたからであろう。私の母が郵便局で風葉へ原稿を送る書留を見たと話したことがあった。私は母の取っていた婦女界で小栗の小説を読み、作者に抗議の手紙を出したところが返事のハガキが来て、出版社側の都合だから云々と書いてあった。そういうハガキその他が残っていると面白いのだが、地震でつぶれた家の下敷きになって無くなってしまった。

中村の鵠沼の家は引地川に面している眺望はいいが小さな家で、辻堂の家は冗談に私たちが「御殿」と呼んだほどの規模であった。ここにずっと住み戦後彼はここで死んだ。一昨年に碑が建った。昭和二十四年五月十三日死。葬儀の日、岡

田三郎の泣きはらしたかに見える目が印象的であった。

日吉 早苗

私が口を聞いて藤沢（の）中学（編集注：鵠沼中学、同校の校歌の作詞者）の英語教師になったユーモア作家で、馬込以来の友人だが一風変わったところがあって、山本周五郎など大分いらいらしたらしい。さよならといって帰って行くとき玄関の戸を閉め忘れていく話、雨の日、濡れた靴下のまま座敷へ上ったら佐々木邦夫人が脱がせて乾かしてくれたのを「親切な人ですねえ」といった、山本は「濡れた靴下のまま座布団に座られては、閉口するからねえ。」と辛辣な感想を述べた。私の家から帰るとき玄関を出ると、二、三間先の松の木に立ち小便をした。そこがすでに道と思い誤ったらしい姿勢だった。

井口小夜子いわく「日吉さんという方、知りません。」ところが日吉は鳴山に井口を紹介するから行こうと誘ったという。　（昭和）二十八年死亡。

山澤 種樹（味岡 敏雄）

I・S・Tという署名で戦後、東京新聞文化欄に短評を書いていたが、元来は小説家が志望であった。私の最初の隣組で**中村秋一**も仲間であった。中村は戦争中死亡し山澤は文学報国会に勤め終戦によって解散するまでつづいたので親しくなった。福島支部（編集注：今井は戦時中福島に疎開していた）へ二度来たし、一度は盛岡まで同行、鈴木彦次郎を訪問したこともある。ペンネーム味岡敏雄といった。辻堂の武羅夫を一緒に訪ねたこともある。報国会に入るとき、武羅夫に紹介状を書いたのは私であった。日吉より一年早く死去。

宮内 寒彌

戦時中、道で偶然逢い自己紹介を受けた。彼が入隊する前日また道で偶然逢った。戦後、部屋借りの私のところへ連れて来たのは山澤であったが、急速に親しくなり毎日のように来訪するようになった。それは彼の家の近所に家を建てたことによって、ますます度を加えたが、そのうち熱がさめたと見え足が遠のき現在は腰越に移ったので、滅多に顔を合わせることも無くなった。

寺崎 浩

戦後、大分経ってからの鵠沼住人で、いつか何年位いたのだったろうねと訊い

たところ、八年という返事を貰ってびっくりした。彼は初めからこの土地になじめなかったらしく、厚木と追浜とを結んで飛ぶ航空機はみんな我が家の上空を飛ぶと随筆で文句を付けたくらいである。彼は小田急の駅などでこれらしいと思う人物に逢っても名前が分からないから困る、ひとつ会でも作ってくれないかと話を持ちかけて来た。そして出来上がったのが「すわん会」である。名付け親は渡辺紳一郎であった。会長も会名も世話人もその都度ということにして全てなしにしようじゃないかと提案した私は重荷をしょいたくない逃げ口上だったが、その時渡辺が「すわん会」はどうだと言い出した。万年筆みたいと野次が飛ぶと渡辺はすぐ「酒をすわんかい、さ。もうひとつ言えば、おっぱいすわんかい、さ。」とつづけ会名は何となく決まってしまった。

寺崎は会を作るのが好きで「あひる会」の鵠沼支部も作った。この方は彼が東京へ去ると有名無実になってしまったが「すわん会」の方はやや形をあらためて一年一回はやっている。第一回は鵠沼の丸政旅館でやったが、思い出すままに名前を並べてみよう。このとき左は腰越、右は平塚までを招集範囲に決めたのは、主として辻本浩太郎を相談相手にしてのことであった。

＊　　＊　　＊

すわん会（編集注：ゴシックは藤沢に住んだ人物）

寺崎 浩　辻本 浩太郎　今井 達夫　鹿島 孝二　戸川 貞雄　原 奎一郎
吉川 清　鉄指 公蔵　栗原 光三　**鳴山 草平**　西川 光　**宮内 寒弥　塩野 周策**
渡辺 紳一郎　菅野 圭哉　**上田 臥牛　利根 巍雄**　森 ひろし　**佐多 芳郎**
真鍋 元之

＊　　＊　　＊

邦枝 完二

（昭和）十九年から鵠沼住人。

子母沢 寛

戦前から夏は来ていたが、ほんとの住人になったのは戦後で、この二人の大家と知ったのは、ともに戦後のことである。子母沢は酒を飲まないからつき合いが単純になった。（オール読物「子母沢寛」）

すわん会の前、似たような集まりが二、三回あった。
一回目は江の島「さぬきや」で池田 浩二肝入りのもの。戸川、鹿島、真鍋、山沢、日吉、鳴山、今井、等。
二回目は「池田書店鵠沼邸」鹿島、日吉、鳴山、今井、その他。
三回目は「江の島館」邦枝、山沢、日吉、鳴山、宮内、今井、等。
子母沢寛の提唱で赤門(編集注:吉川が住職の真徳寺)に集まったことがあった。
子母沢、鹿島、宮内、三橋一夫、鳴山、日吉、吉川、今井、その他。
同じく子母沢の提唱で厚木の漁業組合長の家(船宿)で舟を出したことがあった。
子母沢、岩崎、日高、今井、等。船宿の二階座敷で、鮎を喰い飲んだ。

吉川 清

「出雲の阿国」出版記念会。藤沢市医師会館。司会者日高 基裕。子母沢 寛、毛利、葉山 冬子、今井、その他。
「時宗阿弥教壇の研究」出版祝賀会。東京山水楼。司会者服部 清道。鳥海、美川、寺崎、原 悦道、今井、その他。会の途中で山本、門馬とともに現れ大声を発して去る。その月末、中学の同級だった渡辺 忠雄の肝入りで、山梨時事の招待を受けた私は吉川、今井 欣三郎を伴い甲府に行き両三日歓待を受けた。六月十三日午後山本からの電話で「都」へ行くと吉川と三橋 一夫がいた。その月の「すわん会」に吉川出席、鉄指の闘牛士、彼の牛によってトレアドルを歌う。昭和の初めから数え切れないほど彼の牛のために歌ったトレアドルはこれが最後になった。六月三十日死去したのである。爾来、六月三十日を赤門忌と称し、はじめ中学時代の仲間十人ほど集まり赤門で彼を偲んだが「すわん会」を合同する提案にみんな賛成してくれたので、会は盛大になり多い時は四十名ちかい参会者があった。「すわん会」は秋の月見の会とともに行事が定着したといえよう。

＊　　＊　　＊

麻雀の会

私の家で十年近く催したのは、大島十九郎の熱意に誘い出されたというべきだろう。常連は大島、筒井 芳太郎、倉島 竹二郎、鹿島 孝二、鳴山 草平、ほかに一回か二回ずつ登場した顔ぶれに中沢 巫夫、知切 光歳、寺崎 浩などがいる。
大島と筒井が相次いで死去したため、二人の追善麻雀会を箱根で開いてのちは

会は中絶というよりは、私が麻雀をやめて終末を告げた。

＊　　＊　　＊

石田 一郎

馬込以来の友人だが、彼を藤沢（の）中学（編集注：鵠沼中学、同校の校歌の作曲をしている）の音楽教師に世話したのは日吉早苗であった。戦後、民間放送局ができるとともにJOKR（編集注：現、TBS東京放送）に籍を置いたが、もう定年になった。藤沢から茅ケ崎に移り作曲をつづけている。

戦時中、彼を煩わして有志たちが集い、近代音楽について講義を聞いたことはいい思い出になっている。有志のなかには、熱海からわざわざ出て来た田岡 典夫もいた。

三橋 一夫

博友社の高橋 栄次に社で紹介された。不思議小説と銘打った二冊の短編集のなかには密度の濃い作品と、はっきり対蹠的なものとが分かれていた。「天国は盃のなかに」は流れる如き行文だったのだが。密度の濃い方は伊豆山に住んでいたころのものだし、対蹠的な方はその後の作品であることが、はっきり区別できた。

しかし、彼の言葉のなかで「傑作といわれる時代小説の短編を現代ものに直して移してみましたらね。隙間だらけなのにびっくりしました。」というのは今でも耳に残っている。彼は鎌倉に住み、二十七年頃から鵠沼に住んだ。山本を先生と呼び、私を先輩と呼んだが、この区別にはある神経があった。朝日の文化欄の匿名月旦で、私のことを書いたと白状したのは、赤門で子母沢たちと集まった帰り道でのことであった。日吉の葬式の時の話。

白井 喬二

もと東屋の庭にある二階家のはなれにしばらく住んでいたが、鵠沼づき合いはほとんどなかった。戸川市長時代、一度七夕祭に招待されたとき一緒になったのと、二十七日会が腰越旅館で会をやった時、竹田敏彦に逢いに来たとき逢った位なものである。鵠沼づき合いを避けているという印象だったので、私の方も控えたのであった。

川口 松太郎

鵠沼づき合いをしないと文章に書いて公表したのはどういうつもりだったか。私たちはそれを尊重することにしたが、或る夕方、友人とそんな話をしながら門前を通りかかると、ひょっこり出て来た彼は私たちと一緒に歩き出し、その話を持ち出すと、そんなことはないと否定して私の家の玄関まで入って来たが上がらないでまわれ右をした。私の方は寄ることを勧めるのを遠慮したのだが、彼はどう受け取ったであろうか。長谷川 一夫の別荘の隣の鉄筋コンクリートの防音装置の付いた建物である。

野口 米次郎

墓は藤沢の寺（編集注：藤沢本町 4-5 常光寺、墓は息子のイサムノグチ設計）にある。住職は親戚の野口＝＝である。

中里 恒子

藤沢東海道に面した稲本呉服店の近所にあったやはり呉服店が生家だとのことである。

吉井 勇

「君に似し 遠国人（とつくにびと）の 乙女住む 江の島道の ひまわりの館」片瀬に住んだことを片瀬の旅館のお上が教えてくれた。

江見 水蔭

江の島の洞窟を探検した話が残っている。

長与 善郎

劉生のところへ遊びに来る途中、片瀬と腰越の境界線の上に建っている別荘に一泊したと劉生絵日記は書きとめている。現在は廃業したが戦後、天風荘ホテルとして客を泊めていた。

井口 小夜子

キングレコード専属歌手。桜が岡在住。すわん会会員。

北村 孟徳

百閒の弟子の随筆家。江ノ電の社長だったが（昭和）四十三年十二月死去。すわん会会員。私はしばしば一緒に飲んだ。大島 十九郎の紹介で知ったのである。すわん会に力を尽くしてくれた。

塚本 茂

洋画家。

上田 臥牛

日本画家。邦枝の家ではじめて逢う。鵠沼あひる会の世話人であった。

佐多 芳郎

日本画家。鵠沼あひる会。丸ビルの画廊で一回だけ展覧会をやった。

室伏 高信

先年死去した夫人と三人の女児は鵠沼石上に住んでいた。長女は中国で死んだ。

福本 和夫

福本イズムの提唱者。藤沢諏訪神社境内に住んでいる。

編集注：今井達夫は昭和 43 年に脳溢血で倒れた。この原稿は、懸命のリハビリののち、昭和 45 年に左手で執筆された。

「鵠沼を語る会」活動の記録

（平成２３年４月～平成２３年９月）　総務担当

運営委員会　　３月２８日（火）　　１１名出席

平成２３年４月例会　４月１２日（火）１０時～１２時　　２５名出席

議題１　会誌１０２号について ― 出席者に席上配布した。欠席者には従来通り別途配布とした。

議題２　平成２３年度活動提案・要望について ― 広く会員の皆からの提案を要請された。

議題３　その他 ― 新会員２名の紹介ならびに挨拶を受けた.

お話 ―『岸田劉生と鵠沼』レディオ湘南生涯学習大学放送講座 講師岡田会員。先月に続き、第５週および６週分の説明および補足解説をされた。

公益的市民活動助成事業のまとめ報告会　４月１４日市役所への報告、５月１４日公開報告会 ― 昨年度取組んだ「相模国準四国八十八ヶ所」の調査のまとめを、内藤会長および事務局にて発表し、審査員の方々から「なかなか有益な活動をされた」と高い評価をいただいた旨、報告があった。

運営委員会　　４月２６日（火）　　１１名出席

第２５回総会・５月例会　５月１０日（火）１０時～１１時１５分　２３名出席

総会 ― 中島会員の司会により内藤会長、竹村鵠沼市民センター長の挨拶の後、配付議案書の審議を行なった。平成２２年度事業報告、収支決算報告、今年度の事業計画、予算案および役員の提案がされ、全会一致で承認された。

主な内容、今年度事業計画案

史跡巡り/見学会/展示会―馬込文士村文学散歩、藤沢の巨樹めぐり、徳冨蘆花旧居見学、公民館まつり展示

グループ調査研究 ― 時代小説家、挿絵画家、鵠沼の文化人マップ、地名「汐止め」の所在と記念碑建立の動き、関東大震災とハザードマップ、鵠沼の旧い地名の由来

継続プロジェクト ― 今井達夫未発表作品プロジェクト、ホームページ内藤千代子作品を掲載、楮の木プロジェクト

一般向け行事 ― 公開講座

会長人事（定期改選）　　新会長　有田裕一　　←　前会長　内藤喜嗣

新会長挨拶および渡部瞭副会長の閉会の挨拶で終了した。引続き５月例会。

５月例会

６月予定の馬込文士村史跡巡りについて、馬込近郊の土岐会員から馬込についてレクチャーを受けた。

運営委員会　　**５月３１日（火）**　　**１３名出席**

平成２３年６月例会　　**６月１４日（火）１０時～１２時**　　**２４名出席**

新しい試みとして、できるだけ多くの方に進行役を分担してもらうということで今月は竹内会員が担当した。

議題１　馬込文士村散策について ― 今月予定の史跡巡りの説明がされた。

議題２　本年度の活動計画 ― 総会時の事業計画案の各項目の考え方および進め方について説明があった。

議題３　その他 ― 新会員の紹介および挨拶を受けた。

お話 ―『今井達夫と馬込の文士達』　岡田会員

鵠沼及び馬込両方にゆかりのある人を調査し、概略の説明がされた。

史跡巡り「馬込文士村」　６月２１日（火）１０時～　　**１５名参加**

（本文参照）

運営委員会　　**６月２８日（火）**　　**９名出席**

平成２３年７月例会　　**７月１２日（火）１０時～１２時１５分**　**２１名出席**

進行役佐藤弘会員

議題１　鵠沼案内表示板について ―「鵠沼」案内表示板の傷みが激しいため、当会も市民センターに協力していくことの報告があった。

議題２　本年度の活動について ― 一部の事業について説明、論議した。巨樹巡りは意見を反映し、来月から検討していくになった。

議題３　その他 ― この夏熱中症を体験した会員から、資料配布とあわせ注意事項等、貴重な話を披露してもらった。

お話 ― 先月行なわれた史跡巡り「馬込文士村散策」の報告。

スライドを見ながら、参加者から説明と感想を話してもらった。

その後、郷土資料展示室で展示中の「鵠沼のモニュメントと路傍石像物」を渡部瞭会員から解説を受けながら、見学した。

運営委員会　　**7月26日（火）**　　**11名出席**

平成23年8月例会　　**8月9日（火）10時～12時**　　**22名出席**

進行役渡部瞭会員

議題1　**巨樹巡りについて** ― 鵠沼地区の巨樹の資料を配布し、皆から意見をいただいた。

議題2　**会誌について** ― 会誌103号の編集状況が報告された。

議題3　**公民館まつりについて** ― 現在の検討状況が報告された。

議題4　**その他** ― 外部からの問合せにより、片瀬に住んでいた江見水蔭の「沙地浪宅」が何処にあったか、調査途中の状況が報告された。

お話 ―**「東日本大震災の巨大津波」について** ― 内藤喜嗣会員

関心の高まっている大震災について、2回にわたりお話を聞く。

運営委員会　　**8月30日（火）**　　**10名出席**

平成23年9月例会　　**9月13日（火）10時～12時**　　**27名出席**

進行役中島明会員

議題1　**公民館まつりについて** ― 展示テーマを「鵠沼と馬込文士村」とした趣旨について説明があった。

議題2　**会誌103号について** ― 記事および作業日程の説明があった。

議題3　**巨樹巡りについて** ― 藤沢市の巨樹の一覧表配布と、今後の展開について説明があった。

議題4　**その他** ― 読売新聞地方版に鈴木三男吉会員の楷の木への思い入れ等が紹介されたこと、「藤沢今昔まちなかアートめぐり2011」に当会も後援すること、昨年から計画されていた今井達夫の原稿類を馬込に寄贈する日程が10月と決まったこと、「江見水蔭の沙地浪宅」の場所がほぼ確定できたこと、他の説明および報告がされた。

お話 ―**「関東大震災と鵠沼海岸の現状」について** ― 内藤喜嗣会員

先月に引き続き、今回は地元鵠沼を主体に説明された。

新しく加入された会員（4月から9月入会　敬称略）

安藤 公美（あんどう まさみ）、内田 進之助（うちだ しんのすけ）、澤 圭一郎（さわ けいいちろう）、髙橋 博明（たかはし ひろあき）、西野 行（にしの つよし）

参考:　会員総数　63名（9月末日現在）　　（文責　佐藤　弘）

編集後記

＊箱根以西にしか生息しないといわれたクマゼミが鵠沼でも鳴きました。蓮池のハスが今年はことに花付きが多くて見事でした。インド原産、ベトナム国花と知れば、年々高まる気温、水温の結果なのかと得心できます。
節電という言葉が復活する一方、ベクレルとかシーベルトなどという単位の名称がすっかり馴染みになりました。9月に入って、雨台風12号15号と連続襲来。3月の大津波、今回の大洪水と今年は水難続きです。

＊5月10日第25回総会で内藤会長に代わって前会長だった有田裕一氏が再任されました。ご苦労様ですが、会の発展のため、御尽力いただくことになりました。

＊前号に前半（第1,2週分とテキスト）を掲載した藤沢市生涯学習課主催「藤沢市生涯学習大学かわせみ学園」通信学習科の講義、岡田哲明会員による「岸田劉生と鵠沼」の後半の講義録（第3,4,5,6週分）、を今号に掲載しました。

＊今年の「史跡めぐり」は6月21日に実施されました。行き先は東京都大田区大森、目的は「馬込文士村散策」という企画でした。会員14名、会員の家族1名計15名が参加しました。「馬込文士村について」土岐会員に、当日の「訪問記」を安藤会員に執筆していただきました。
最近入会された方が、このように積極的に原稿を書いて下さるのは大歓迎です。

＊それに鵠沼と馬込、双方に関わりのある文士などをリストアップして加えました。

＊山上会員の「くげぬま断章」(Ⅳ)は、エッ、村上春樹がホノルル食堂に？皆さん、きっとびっくりなさったことでしょう。「ホノルル食堂」や「香房」など身近なお店が登場して、たのしい。珠玉のエッセイでした。

＊今井達夫遺稿。今回は、彼と交際のあった藤沢鵠沼周辺に住んだ文士や画家などの人物メモで「鵠沼物語」の草稿？ではないかと思われるものを取り上げました。

＊会では、このたび編集委員を増員し、役割分担や、複数人で回覧校正するシステムを整えるなど、よりよい会誌作りをめざしています。　（岡田）

◆記事訂正：102号P48本文10行目「CD」を削除

『鵠沼』　第103号
平成23年９月30日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行　鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=http://kugenuma.sakura.ne.jp/